

断片集 一道化小嘍一

藤七志 八咫

◇唄の篇◇

一人のみすぼらしい男が、ふと、道端に止まる。不気味な表情の仮面を付けた男だ。

「

紳士淑女の皆様よ。

方々ひつつめ襟首閉めて、諸手を上げます高らかに。声張り上げて唄うはワタクシ。身振り手振りは宛(さなが)ら舞踏か、若しくは気でも触れたが如く。されどもワタクシ確(しか)りと此処に、心と意識が唄って御座る。気狂い、違いの、類で御座らん。しがな道化のおどけの小唄(こばなし)。

暫しゆるりと足止め、目止め、耳をば傾けいただきますれば、きっとワタクシ皆様方に、余興を御披露、御披露目します。

」

かくり、かくりと、男は拍子に合わせて機械仕掛けの人形じみて動きながら、一旦言葉を止めて辺りを見回す。

「

嗚呼、おや、なんとも魂消(たまげ)た事に、唄をば歌い始めたばかりで、其処でくすりと御笑うご婦人。ワタクシ如きの小唄を聴いて、笑うて頂き有難や。頭(こうべ)を下げてと思えますれど、頭垂れては話が出来ぬ。話は出来るが言葉が籠る。すると不思議と皆様方に、小唄小唄が届きませなんだ。故に一度(ひとたび)、会釈で失敬。

さてと、やあとで唄いましょうや。素晴らしきかな人の世の、誠(まこと)愉快的一唄。荒唐無稽な人唄。押しも押されぬ大波風の、一辺たるやは愉快に耐えぬ。ともすれ例えば歌舞伎や戯曲の、大立ち回りに大暴れ。この世の全てをひっくり返し、慄(おのの)き、腹をば、はらりとさして。そんな類の事ばかり。空蝉、現実、世の有様よ。

空前絶後は常ならむ。

絶句必死は毎晩毎夜。

啞然呆然、晩酌だ。

故に愉快的人の世よ。

よくよく聞いておくんなさいよ。其れとも既に御知りか知らん。

いえいえどうして知りましょうかや。なにせ今より唄う小唄は、誰かに見聞せしめられたる、若

しくは個人に語り継がる、数多の噺と訳が違う。古今東西選りすぐり、横行跋扈の語りで御座らん。況(いわん)や此れが既に在る、継がれに継がれた唄だとしても、語るはワタクシお道化で、滑稽巧みに語れます。見事に道行く皆様の、度胆をゆらり、くら、くらり。確りと御揺らし致します。

切った張ったの唄でなし。聞いた聞かない、問答無用。ご覧御座来、正規の小唄を。お聴きください、正気の小噺。もしももしもで此の小噺が、誠愉快であったらば、拍手喝采要りませぬ。勿論御代は取りませぬ。唯々(ただただ)息をお吐きになるな。愈々(いよいよ)目玉をひん剥いて、或いは腹をば振(よじ)っていただき、はてな小首を傾けますれば、愈々以てワタクシ迄も、調子の調子が良い調子。さあさ、さあさの此処等で、勿体振るのを辞めにして、早速唄ってみましょうや。ゆるりと見聞御座来や。

」

今度は深々とお辞儀をすると、男は暫くその体勢のままに硬直した。まるで銅像だ。まるで石像だ。恰(あたか)も其れが、通りに初めら置かれているかの如く、一切合切微動にせず、然もあるものと言いたげに、人の通りに突っ立っている。

数刻の沈黙が経過したのか。細かな時間は定かではないが、しかし男は再び頭を擡(もた)げては、壊れた様な、おかしくなったような笑顔のままに口を開くのだ。

「

例えば其れは、一つの小噺。聞いて痛快、語りて愉快。暫し傾聴、御頼み候(そうろう)。お道化、語って聞かせましょうや。

先ずは一人の男で御座い。どうにも救えぬ男に御座る。

男は常より笑ってしまして、彼は笑って暮らしています。

心は何処に在るのか知らん。思いは夢想に揺蕩(たゆた)い沈む。誰も彼もが嫌っておいでだ。理解出来ぬと嫌って御座る。

自然と男は一人になった。自然と彼は孤独になった。一人になると、人とは不思議。自身と語らう機が増える。自身と語らう刻が増え、男は一つの疑問を持った。疑問は無意識、男の夢に、そろり、そろりと現れ出でて、困った事を吐き出した。男は、最初は困って見せて、けれども自分と話してみると、困った事に合点がいった。男は成程、答えを見つけ、以降は一層一人に御座る。余計に人から嫌われて、遂には一人で生きていく。

さてと愈々孤独が祟り、遂には周りの理解を捨てた。理解さるゝを捨て出した。

男は常より笑ってしまして、彼は笑って暮らしています。

男は独りで笑ってしまして、彼は孤独に逝くので御座る。

嗚呼、アァ。何と滑稽、愉快。人は独りで生きられぬ。人は独りで逝けるのに。

周りを捨てたばかりに、男は他人に捨てられた。

嗚呼・・・・・アア・・・・・なんとも愚かな奴だ。皆と同じに号令一下、右向け右よで居れば済むのに。命令無視したばかりに、上官殿に銃殺だ。味方の同期の新兵さんに、締め出し、弾かれ、孤独に逝った。

こうして男は気狂い扱い。結構結構、愉快に御座る。

例えば其れは、一つの小噺。聞いて痛快、語りて愉快。暫し傾聴、御頼み候。お道化、語って聞かせましょうや。

次いでは一人の女で御座い。どうにも救えぬ女に御座る。

女は常より周りを見廻し、彼女の日々は憶病其の物。

例えば女は頷き続け、だから周りも良く喋る。彼女に話せば「そうだ」に「成程」。首肯の言葉が返って御座る。そんなら吾(ワレ)もと話をするや、再び女は頷くばかり。

其れが双方違った言い分、其れが互いに分かれた意見、其の他諸々あったにすれど、彼女は只管(ひたすら)頷くばかり。だから周りは良い気分。なかに、不思議な事もなく、女は意中の男の事も「そうだね」、「うんうん」、頷くばかり。男が右をば向けなど言えば、女は構わず右を向く。男が笑えと言ったなら、例えば涙に臥(ふ)せていても、彼女は笑って返します。なんとも見事に憐れが過ぎて、友人、知人に家族や其の他、彼女に少しの助言をすれど、「わかった」、「成程」、変わらず終い。もの見事に首肯するから、少しは女が変わると思う。思っ様子を伺えど、其れは一分も変わりなく、だから周りは、「成程」、「納得」。女は決して聞いてはいても、抗う事を出来ぬと知った。知ったらどうにも腹が立つ。ならば吾との話の首肯、一切合切聞いては居ても、全く同意の意ではなく、ただただ頷く女であった。勿論誰もが腹を立て、以降、一切女を捨てた。知人、友人、家族や其の他。「女の事は～」と捨て置いた。女は遂には男と共に、今じゃあすっかり土の下。

生きるを苦しめた金無し男の、言いに従い冥途にお供。

女は常より周りを見廻し、彼女の日々は憶病其の物。

女は常より自分が大好き、彼女は周りに自分を安売り。

嗚呼、アア。何と滑稽、愉快。頷くばかりじゃ生きられぬ。周りが生かす、訳でもないのに。唯々頷くばかりに、女は“ホント”に捨てられた。

嗚呼・・・・・アア・・・・・なんとも愚かな奴だ。多少のいざこざ好かんと思ひ、自分の言葉を溜め込んだ。只管敬礼、言う事聞いて、玉砕必死の突進だ。終いに周りが悪いと言って、妬みに恨みを抱いているに、其れすら気附かぬ木偶ノボー。

こうして女は男と心中。結構結構、愉快に御座る。

例えば其れは、一つの小噺。聞いて痛快、語りて愉快。暫し傾聴、御頼み候。お道化、語って聞かせましょうや。

お次は一人の男で御座い。どうにも救えぬ男に御座る。

男は常より温厚温和で、彼の外面おどおどヘコヘコ。

職場に、他人に、頭を下げる。例えば其れが年下だって、誰彼構わず頭を下げて、彼の口から決まってるつも、「すいません」、やら、なんやらかやら。誰が悪いか関係ないよ。すぐに謝る男の心、誰が知りようものかしら。何に怯えているか知らん。兎に角よくよく謝る男だ。だから評判、頗(すこぶ)る良いよ。仕事の終わりや休みの日にも、絶えず連絡やってきて、頼まれ事にお使いに。銭にもならない仕事に来るよ。彼も彼とて、しかして人間。勿論楽しい筈がない。良いよに使われてるのは分かる。だから男の怒りの先は、決まって家族と相成り候(そうろう)。愉快痛快、支離滅裂に。男が家にいる時なぞは、怒鳴るは叫ぶは大変だ。お祭り騒ぎだ、喧嘩だ火事だ。やあの、やあとで大暴れ。奥さん子供は男の外面、知っているからなお辛い。子供が小さい時ならいつも、男が怒鳴って終わった話。だけど子供も大きくなるよ。大きくなったら分別つくよ。分別ついたら嫌でも気附く。男がするのは躑でなしに、やり場をなくした怒りを振るう、七つ当たりに八つ当たり。そしたら気付いた我慢の無意味。男にすれば八つ当たり、奥さん子供にしてみれば、八つを超えて九つ、十と、不満が溜まっていたか知らん。

或る時男が帰ると居間で、奥さん一人で懸命必死に、一心不乱で鞆の中へ、着物や何やら詰め込んで、家を出ようと準備の最中。だから男は奥さん捕まえ、何処に行くのか尋ねたよ。すると奥さんあっけらかんと、「実家に帰る」と言ったが最後、男の血潮が頭に上り、自分の愛した人だと言うに、むんずと掴んだ首根っこ。きりきり絞めてあの世に送った。御用と相成る男を送る、息子、娘は見限った。冷たい金属、柵の中。男は孤独にあの世逝き。

男は常より温厚温和で、彼の外面おどおどヘコヘコ。

男は常より社会に諦め、彼は自分を無意味に安売り。

嗚呼、アア。何と滑稽、愉快。外面良くても中身は普通だ。釈迦や基督(キリスト)気取りか知らん。只管八方美人で居ようと、肝心要を自ら捨てた。

嗚呼・・・・アア・・・・なんとも愚かな奴だ。“此れが社会の常だ”の云々、悟った振りして踏ん反り返る。これじゃ、無能な上官様だよ。御上の顔色必死に伺い、大事な部下を皆殺し。終いに「根性足りぬ」だ云々、「気持ちの弛みだ、やれ食いしばれ」。手にする棒切れ振り回す。当たった場所が悪いか知らん。大事な部下は名誉の戦死か？ 否々(いやいや)単なる犬死だ。

こうして男はホントの幸せ、気付かぬままよ、で捨てられた。結構結構、愉快に御座る。

例えば其れは、一つの小噺。聞いて痛快、語りて愉快。暫し傾聴、御頼み候。お道化、語って聞かせましょうや。

更に続くよ、滑稽噺。どうにも救えぬ女が一人。

女は常より孤高で御座い。彼女の日々、是(コレ)唯我独尊。

何より仕事が生き甲斐だ。誰にも劣らぬ仕事振り。どころか見渡す周辺全て、彼女に勝る者は無し。兎角何でも人より出来る。出来れば勿論頼られる。同じ道理で考えますれば、誰かに頼る

事も無し。彼女は自分に、誇りを持った。誇りがあるから弱みは出さぬ。出せば負けだと思って御座る。懸命必死に駆け抜けて、唯我独尊、磨かれた。理由も根拠も在るから一層、性質(タチ)が悪くて仕方ない。最初は頼られ、輝く彼女。けれども気付けば辺りは空だ。可愛気ないから、男が寄らぬ。妥協を知らぬと、女も寄らぬ。口が達者と上司は逃げるよ。目標高いと部下まで逃げた。詰まる所で彼女は独り。世の中、程度が大事です。女は未だに気附くかぬまよ。何せ自分に自信があるから、間違ってるとは思ぬ様だ。今更誰が助言をするやら。今の女の生き方を、少しの理解も出来る者。やって来るかは誰にもわからん。其れでも女は働くよ。其れが自分の為だと思い、其れが周りの為だと思い、唯々懸命、必死になって、粉骨砕身、仕事に生きる。こうして女は孤独のままだ。何処の誰をも寄せ付けぬ、強い人へと相成り候。ところがどうだい、外皮剥げば、孤独のまんまの女に御座る。全く以て、困ったもんだ。“振り回される”を辞めたが為に、振り回されぬと肝座らせて、そのまま地べたに座ったまんま、身動き取れずに取り残された。

女は常より孤高で御座い。彼女の日々は唯我独尊。

女は常より自尊の塊。彼女の日々は強がりだけだよ。

嗚呼、アア。何と滑稽、愉快。強がり、努力が裏目に出るよ。其れがわからぬ、知る気もないよ。周りに自分を認めて欲しくて、毛嫌いしている泣き寝入り。そのまま“妾(わたし)は強い”と言って、周りに頼らぬ愚か者。

嗚呼・・・・アア・・・・なんとも愚かな奴だ。頼らぬ事こそ自立と思い、一人で生きてる勘違い。如何に優れた兵隊さんも、単身進めば、戦果は取れぬ。其れを知らぬは兵隊さんか。いえいえ、其れじゃあ英雄気取り。勝手気ままに進んで行って、味方の師団の追い付く前に、銃剣構えて蜂の巣だ。

こうして女は誰からも、阻害されぬが頼られぬ。結構結構、愉快に御座る。

例えば其れは、一つの小噺。聞いて痛快、語りて愉快。暫し傾聴、御頼み候。お道化、語って聞かせましょうや。

そろそろ終盤、滑稽噺。なんとも救えぬ男が一人。

男は常より自信に満ちて、彼は己惚れ、周りを知らぬ。

彼は言うなら天才だった。彼は小さな頃より神童。周りは驚き目を見張る。勉学その他に朝飯前だ。皆が必死に勉強しても、横で頬杖、居眠りだけで、周りの努力を無に帰す。仕舞に教鞭振ってるセンセに、反論、反発、楯突く始末。此れにはセンセもたじたじだ。怒って男に反論すれど、男の言葉が何よりの確。寸分違わぬ答えで以て、論破の雨だよ、大変だ。小学校も半ばを過ぎると、愈々彼には誰一人、何を教える事もなく、下手うちゃ休んだセンセの代わり、教卓立っての大演説だよ。当然、中学、高校と、相も変わらず頬杖、昼寝。何度も先生頭を捻る。あの手此の手の策練れど、意味はないない、残念無念。男は順調(ジュンチョ)に学校出ると、小さな会社に入ります。其れには周囲も驚いた。もっと上でも良かった筈が、誠慎まし小さな会社。男は

暫く、文句も言わず。懸命必死の振りをして、汗をば流して働いた。或る時男が小さな会社、辞表を出したと思ったら、突然会社を起ち上げて、成程どうして周りの人も、「ああ、成程な」と合点がいったよ。

男の作った会社はすぐに、数多の会社の争い抜けて、一流よりも更に上。周りも勿論納得だ。だけでも本人満足出来ぬ。部下の仕事の甘さや遅さ、次から次へと文句が出るよ。文句にまみれたお城の殿様、当然部下は嫌うだけ。どうしたもんかと思うてみれど、男は自分が悪いと言わぬ。言わぬどころか露ほど思わぬ。無能が悪いと見下して、「解らぬ阿呆」と罵倒が増えた。学徒の時分の頬杖、居眠り、まだまだ可愛げあったがしかし、度を越え始めてりゃ愈々以て、何処の誰とも手に負えぬ。恨み辛みを莫塵(ごご)の替わりに、横柄、威張って暮らしていると、ある日男はふと気付く。日々の連なり、暮らしも所詮、見下す相手と差異など御座らん。周りを見下し、威張っていれど、自信に溢れた男の心、ぽっかり孔が開いてたよ。結局自分の行いも、阿呆の真似事、二の舞だ。周りと同じになりたくなくて、自分は才在る者だと思い、成れど果てるは同じ道。長らく高見を追い求め、自信と言う道歩いた男、漸く大事が何かを知った。知ったがしかして手遅れだ。気付くの遅いばかりに、不満の塊、しこりの類、魑魅魍魎が諸々に。自身が撒いた不徳の芽、随分大きく育って御座る。いつしか苗床破って出でて、男は不徳に食い破られた。

男は常より自信に満ちて、彼は己惚れ、周りを知らぬ。

男は常より傍迷惑で、彼は他人を知らぬまま。

嗚呼、アア。何と滑稽、愉快。天才故に、平凡知らず。己の尺度が標準規格。其れしか知らぬが憐れに御座る。自分が出来るばかりに、周りに結果を求めます。周りを知らない神童故に、巡り巡って愚か者。白痴の類と言われても、反論返答、出来るか知らん。

嗚呼・・・・・アア・・・・・なんとも愚かな奴だ。自分が特殊と判れば良いに、小難しい事しか知らん。作戦練ってる上官様よ、部下は機械や戦車に御座らん。折角頭が優れているなら、其処まで考え、巡る筈。結局適材適所を知らず、上官様の師団は皆、壊滅必死で集団自決。こうして男は誰からも、救われないまま、どころか逆に。憎まれ、殺され、あの世逝き。結構結構、愉快に御座る。

例えば其れは、一つの小噺。聞いて痛快、語りて愉快。暫し傾聴、御頼み候。お道化、語って聞かせましょうや。

此れで最後だ、滑稽噺。どうにも救えぬ女が一人。

言ってしまうえば彼女は壊れた。どころか最初の最初から、既に壊れていたかも知らん。

体に異常があるでもなしに、心に不和があっただけ。生まれた時から負わされた、異端と異常の申し子だ。トンでもおかしい女に御座い。ところがどうだい、黙っていれば、何処の婦人も羨む程の、どんな紳士も振り向くまでの、其れこそ異常と言っても足りぬ、絶世、麗し、美貌があった。

彼女に家はあったか知らん。彼女に家族があったか知らん。女の過去を知る者は、彼女を於いて他に無し。其れでも彼女は異常であるから、記憶も思いもカカアの胎中(はらなか)、忘れに忘れて彷徨い至る。だから女の過去全て、あって、ないよな物にて候。

女の何処がおかしいか。お聞きの皆様わかりませなんだ。其れ故今より語りますが、しかして今から語るゝ話や、此処、至るまでの御噺全て、ワタクシお道化、見てきた事実。

ほんの少しのやゝ程ばかり、信じられぬとお思いでしょう。信ずる、疑る、双方共に、皆々様に、お任せします。どうかどうか、最後まで、お聞き下さいますように。

」

急な調子で男が言うと、ぐっと声色を落として立ち尽くし、話を聞いていた周りの人々の顔を順々に覗き込む。幾らか沈黙のままに時間を過ごした後、再び明るい調子を取って、身振り手振りを入れながら、陽気な調子で口を開いた。

「

はてさて、たったの今しがた、噺に生まれた絶世の美女の、一体何処が異常であるか。ゆるりと語って見せましょう。訥々(とつとつ)語ってご覧にいきます。お聞きの皆様、心の準備を。此れがホントの噺の山だ。楽し、恐ろし、この小噺の、本命、真打、登場だ。

今は恐らく牢屋の中か、将又地獄の出入り口。閻魔様とて受け入れ御免だ。其れ程狂気に魅せられた、憐れな女に御座います。

兎に角、女は壊れた様に、何を言っても明後日返事。何を聞いても上の空やら、訳の分からぬ世迷言。見開く眼(まなこ)は大気を彷徨い、決して此の世に興味を示さず、光も消えて孤独のまゝよ。しかし彼女も事により、見開く眼に光を宿す。食べ物？ ハンサム？ 輝くおべゝ？ いえいえ、そんな物では御座らん。女の喜び、其の素は、生くる人より取り出したるゝ、鮮血滴り、生温かな、五臓に顔をば埋める事よ。故に彼女は道行く人の、将(はた)又(また)家にて寛ぐ人を、斬って裂いての大惨事。散々満足いったなら、今度は自ら綺麗な顔、手前が穿った穴に入れ、奇怪、狂気を有り丈詰めた、奇声を上げて大笑い。一から十まで堪能すれば、後は飽きたと言いたげに、女は自ら奪った命、事も無い様に其の場に捨てて、のらりくらりと歩き出す。顔中、服中、辺りも全て、血まみれ紅(くれない)、大洪水よ。真っ赤に染めたる其の全て。隠す、恥じるもしないまゝ、ふらふら歩いて、次探し。次を見つけて、また繰り返す。異常と狂気の大合唱。

全てが事実の出来事だ。ワタクシ、お道化、小唄の類。唄い語っていますが、しかし、決して嘘など言いません。双(ふた)の眼(まなこ)は偽りならぬ、確か、確実、見て覚え、話を聞いて御座います。故に其処行く皆々様が、耳を疑いますれども、誠にあった話で御座る。こうしてお話している今も、此の世の何処かにある噺。此の世の何処にもある噺。聞いて驚き、見て仰天の。既に正気を無くした話だ。如何に毛嫌い、否定をすれど、此れこそ事実で御座います。此れこそ正しくお道化た噺。此れこそ滑稽、与太話。

さても、角もで皆々様よ。左様な話は如何か知らん。奇奇怪怪なる陽気な唄よ。奇妙奇天烈、驚愕事実の、笑うに笑えぬ笑い種。

」

暗転

世界中の全ての人が、木偶ノポーなら

恐らく私は――道端に転がる小さな小石ですら、ないのだろう。

詠う道化の溢した一言より



白——薄気味悪い色。気持ちの悪い色。不快な色。気分が悪くなる色。嫌いな色。少なくとも僕はそう、感じている。少なからずとも僕は、そう認識している。兎角、白は気持ち悪いのだ。決まって必ず、嫌悪すべき色なのだ。それが白。

何と無機質な事か。何と明るい事か。

即ちそれは、僕と言うちっぽけな存在を全て包み、そして押し潰す。憧れであったし、慈しむべき対象であったし、それは何より憎悪するものだ。

白、白、白。

いつからだろうか。僕が此処に居るのは。

辺りは一面、白一色の部屋だった。

白い調度品が並び、四方その全てが白色だった。そんな部屋。誰に言われるでもなく僕は、その白い部屋の中、“雑に”と言って遜色ない、規則性のない置き方をされた一人掛け用のソファーに腰を下ろしている。そして何とも居た堪れない気持ちになっていた。

僕は白が嫌いだ。

その僕を、事もあろうに白色が包んでいる。至る所から、僕の嫌いな白が、まるで僕を攻め立てる様にして、周辺に散乱し、静かに睨みつけているみたいだ。だからこそ、居場所がなかった。不愉快な思いしかしなかった。そしてその思いは今にも嗚咽となって、僕の口から飛び出そうな程である。それでも僕は、懸命に何か口から零れ出るのを押え、ソファーに座る。否、座っている。意味はない。わからない。どこかそれは、一種強迫してくるように、今にも首を絞めるぞ、と言う様に僕の双肩にずしりと乗っていた。

辺りを見回し、思う。本当に、救えない程に、ありったけ全てが白い。棚と、椅子と、壁紙と。背の高い、恐らくは僕が立ち上がっても一番上に乗せられた光の玉を、僕が手に出来ないだろう高さのスタンドが、物言わず、ただただ僕を、侮蔑するかの如く見下ろしているだけである。不思議な物で、此処まで嫌悪すべき対象に囲まれていると、どうにかなってしまったのか、感覚が歪んでいた。距離がわからず、高さがわからず、既にどういう状態で、僕が何処に存在しているかもわからない。そんな状況だ。

と、僕の前に、一人の男が現れた。何処かで見覚えのある、しかし何処にでも居そうな面影を微塵も感じさせない雰囲気を持つ男。

彼は突然、僕の前に現れた。本当に、突然と言う言葉が相応しい登場だった。

見直し、誰もいない事を確認している筈なのに。この部屋に、扉や窓はない筈なのに。男はいつしかそこに現れ、僕と向かい合う形で、座っている。無造作に置かれている為に、真正面とは言えないが、それでも極めて真正面に近い位置で、僕と同じくソファに腰を下ろしている。両の足を適当に広げ、腕置きに両腕を預け、それと同じくらいに背を預けて座る僕。気付けば、僕は真っ黒なスーツを着ていた。

対面している男。彼は白いスーツを着ていて、足を組んでいる。肘を腕置きに置いてはいるが、手先は腹の前で軽く組まれていた。同じく背を預け、僕と違って顎を上げていた。

随分と狡猾そうな笑みを浮かべ、僕の右横に立っているスタンド以上に僕を蔑んだ目で見つめ、ただただ呼吸だけをしている。静かに、ゆっくりと。そして口を開くのだ。

「ようこそ。この何もない、不愉快な部屋へ」

男は一層口元を歪めて言った。そして両手を広げる。さながらマジシャンがこれからショーを始めるが如く。しかし大層気怠そうにしながら。そして言葉を続けるのだ。やはり、何処か僕を蔑んだような物言いで。僕を憐れんでいる様な瞳の色で。彼は言うのだ。

「何を言う必要もない、という事かな」

僕は返事を返さない。だから男は一方的に言葉を並べる。

「そうだろうな。事実、俺はお前の言葉を必要としない。何故ならそれは、俺がこの空間に置いてお前よりもお前を知っているからだ」

得体の知れない呪いを吐いた。僕はなおも、口を閉ざしている。

「この部屋は本当に不愉快だろう。そうさな、吐き気を催す程に、だ」

笑みは数回、意味を変えた。対して僕は、恐らく表情を変えていない。怪訝そうな顔をしているわけでも、興味をそそられた顔をしているわけでもなく、無表情。

「まずまず合格点だ。どうする？ 俺の自己紹介を？」

彼の言葉に首を横へと数回振る。言葉は発さない。すると彼は、途端に詰まらなそうな顔になってから唸り、言葉を探してからそれを纏める作業に入った。何も無いだろう宙を仰ぎ、数回目線を泳がせた後、再び僕へとそれを止める。

「俺はお前を知っている。しかしてお前はどうかだろう。それは些か不公平では？」

初めて、僕は笑った。

初めて、僕は口を開き

始めて、僕ははっとした。

「そんな事、僕の知るところじゃない」

何故そんな言葉を口にしたのか。僕にはわからない。この不気味で不快な白い部屋の所為、とでもしておけば、恐らく気持ちの上では些か軽い。が、僕の驚きを知ってか知らずか、男はなおも詰まらなそうに、今度は片方だけ口元を歪めてそっぽを向く。何に納得したのか、小刻みに数回頭を縦に振りながら。

「そうだな。俺がお前でもそう言うか。知ってはいたが、正面切って言われると、なかなかどうして詰まらない。詰まらないがお前、それはどうにも面白くなってくるぞ」

合点をしている相手と、合点の行かない僕。何より、状況を把握するには決め手が少ない。対面

する男は、妙に親しみのある顔だ。そして服装で、態度で。その全てが、僕の中ではしっくりくる。でも、それだけ。対して相手は、嘘か本当かは定かではないが、恐らく僕を知っている。僕の本質を知っているし、僕と言う存在を知っている。根拠はない。ただ、漠然と彼は僕の事を知っていると感じた。彼が言った通り、恐らく僕の事を僕以上に知っている。

「まあいいか。俺は俺の、仕事をする。割り当てられた、言うなればガキの使いだ。誰でも出来る、簡単な事さ。そして俺は消えて行く」

平淡に言った。先程の表情が嘘の様に、一切の感情をかき消して僕に言った。

「さて質問だ。お前の考えを教えておくれよ」

「嫌だと言ったら？」

「言えなくなるさ」

「そう思う根拠は」

「俺がお前以上にお前を知っている」

僕は暫(しばらく)黙ってみる。大きくため息をついて数秒。しかし、それはそれで、逆に間が持たない事に気付く。だから僕の出方を伺う男に、質問を投げかける事にした。

「君は何を知っている」

「行く先と、行先だ。それ以上は知らないし、それ以下は知る由もない。寧ろ知りたくもない。お前もいつか、この言葉の意味が分かる」

不思議と、彼は自嘲気味に笑んだ。

「答える気は」

そして低い声で僕へと尋ねる。脅す様に尋ねる。だから僕は少しだけ座りを直し、観念したよ、といった意味合いの表情で肩を竦めて男の言葉を促した。男はそれを理解して、言葉続けるらしい。口を開く。

「では聞こう。簡単な質問だ。至って単純な質問さ。俺を見て、どう思う？」

「気味が悪い。頭が悪そうだ。何より偉そうだ」

「正解。お前には、此処がどう映っている？」

「白い部屋だ。何もない。椅子と、棚と、電気スタンドだけ。後は気味が悪い。僕は白が嫌いだからね」

「嘘だ。お前は何故嘘をついた」

「・・・嘘じゃあない」

「ふん。まあいいか。次にいこう。お前は俺を憎んでいるな」

「そんなわけがない。だって僕は、君と初めて此処であった」

「嘘だ。お前は俺を知っている。お前は命をどう考える」

不意だった。あまりに不意で、言葉を欠いた。返事が遅れ、呼吸が遅れた。乱れた、と言って問題ない。それだけ、自然と動揺していた。僕は一度つんのめってから。再び歩き出さんとも取れない程の声で返事を返す。

「命・・・ねえ・・・。そうだな、少なくとも幸せなものとは思ってない」

「正解。その命は、お前に馴染みのあるものか」

「ないね。馴染みはない。命はみんなが持っている。僕が命を馴染みのあるものだとみなすのであれば、命をもつ全てのものが、命と馴染みだ。例えそれが人間じゃなくたって」

「正解。お前は命に一切の馴染みも、執着も持っていない。もし持ちたいと思ったとしても、既にそれは罪だろう？ そしてそれは、叶わない夢だ」

皮肉った笑顔ではなく、寧ろ本心から出たそれ。男は暫く笑顔を浮かべ、再び言葉を纏めだす。

「最後の質問だ。お前は何処から生まれ、何処に向かっている」

その一言で、充分だった。その一言で、充分過ぎた。僕と言う一つの存在、その全ての機能を停止させるには、たったのその一言で足りたのだ。

僕の思考は完全に停止した。

僕の呼吸は完全に停止した。

「今から俺が言う事は事実であり、それをお前や誰かが信じる必要性はない。何故ならそれは紛れもない真実だから。いいか？ 真実とは誰にも信じられる事じゃあ、ない。それはわかるな？」

」

返事が出来ない。何故なら思考が停止しているから。

返事が返せない。何故なら呼吸が止まっているから。

頷く事が出来ない。酸素がないから体に自由はない。

否定する事が出来ない。否定する、必要がないから。

「良いか。あくまでも既存の事実に縛られて物事を考えるな。それは本当の意味で、頭の悪い物と知れ。他者の立てた理論は、即ちお前とは関係のない世界の話だ。それを表装するのは、社会と折り合いをつけるだけと知れ。お前の世界の創造主たるは、お前でなく、お前だ。言っている意味、わかるよな」

漸く。首が傾いた。無意識に？ そう、無意識に。

「本題に入ろう。此処からはお前の言葉は要らない。勿論、俺の“魔法”でお前には物が言えない状況を作っている。簡単だろう？ 何せ俺は、魔法使いだからな」

一層シニカルに笑って、男はゆっくりと立ち上がった。

「人は単一のものである。それは強(あなが)ち間違った見解ではない。が、正解とも言えない。何故か分かるか？ お前——だけではないが、人間は細胞の集まりなんだよ。そして同一の細胞のみで構成されている期間は限りなく少ないんだ。お前が瞬きをするその瞬間に、お前が物を見て、何であるかと認識をするその僅かな時間の合間に、どこかしらの細胞は死亡し、生まれ、死ん

だ細胞の穴を埋める。即ちそれは、コンマ数秒前の自分とは違うもので構成された存在って訳だ。良いか？ これは例え話だ。かなりわかりやすい様に、低能なお前の為に、最もわかりやすい唯物的な表現での事象だ。これと全く同じに考えろ。良いか？」

やっぱり気怠そうに、男は両手をズボンのポケットにねじ込むと、ゆっくりゆっくり僕の前まで歩を進め、静かに僕の顔を覗き込んだ。覗き込んで、続ける。

「精神にも、全くと言って良い程に同じ事が言える。例えばお前が数秒前にこの空間を気持ち悪いと思った。いいや、それだけじゃあない。もっとさまざまな事を考え、思い、思考する。それでも、だ。記憶と言う襷(たすき)リレーであるだけで、今のお前がリアルタイムに思っている事なんかじゃあ、無いんだよ。わかるか？」

記憶と言う・・・襷リレー。

「数秒前のお前はもう、同じ事を見ても元には戻らない。戻ってはこない。即ち、この世の、勿論どこの世にだって、存在しなくなるのさ。存在が消える。お前たちで言うところの“消える”ってのは、どういう事だ？ ああ、そうさ！ “死ぬ”って事だ」

なんとなく、言いたい事が見えてきた。そして、何故だろう。目の前。僕の顔を覗き込み、僕に“魔法の言葉”とやらを掛けたこの男の正体が、なんとなくわかってきた。根拠はなく、理由もない。ただなとなしに、“ああ、きつとこの人は――”と、漠然と思っただけだ。確証なんて、勿論ないけど。

「人が死ねば、それは少なからず誰かに認識される。現実的に人が死を迎えると、家族、友人、その他関係者・・・ふうん・・・まあ、そいつとよろしくやってた誰でもいいが、即ちそう言った奴らがそいつの死を認識する。泣き喚くだろうよ。もしかしたら、大喜びする奴だって出てきそうだが、それはそいつのやってきた事だから、この話には、詰まる所で関係ない。問題なのは、そいつがどんな奴だったとしても、そしてそいつの周りがどんな奴等だったとしても、何を思わない程の人間付き合いしかない奴だとしても、死には認識が伴うって事だ。死を認識されない人間は、そうそういない。誰かわかれなくとも、“誰かが死んでいる”と言う認識はされる。路上でくたばろうが、暖かい病室で天寿を全うしようが、将又亡骸があろうが、無かろうが、等しくそれは“誰かに認識される”と言う事だ。が、日々自分が次々に生まれ、代わる代わる次々に死んでいる事に気付く人間はいない。自分の細胞が死ぬ都度、涙を流す訳には行かないのと一緒に。そしてそれを見て、“ああ、死んだな”と実感する人間はそうそういない。目に見えるものでもそうなのに、目には見えない自分の死を認識する奴なんざ、この世に殆どいないって訳だ」

恐らくは、誰に言っても馬鹿らしいと、一蹴されるであろう言葉。でも、僕にはどうにかしっ

くりくる、そんな言葉だった。そして同時に、僕に掛けた彼の魔法は、実は不完全だった事に気付く。何せ、思考が止まったのは、ほんの一瞬の出来事だったし、呼吸も今では正常に、出来ている。だから僕は、思考した上で、彼の言葉を、納得の上に聞いていた。

「気付かれない事は、どうだろう。なあ？」

長く続くと思われた言葉は、随分とあっさり、幕を閉じた。

真っ白な背広姿のその男。何処かで見た様な、それでいて何処にでも居そうな顔立ちではない、その男。彼はゆっくりと、上体を倒して僕の顔を覗き込んでいた体勢を止める。

ゆっくりと、ゆっくりと体を起こして、僕に背を向けた。僕はそれを目で追い、顔で追った。意味はない。ただ、彼を見ていた。

「少なくとも、俺はそんな事は御免だ。意味のない死は嫌だ。でも、意味のない生はもっと嫌だ。だから俺は足掻くのさ。だから俺たちは(、、、)、懸命に足掻いてきた」

“俺たち” 複数の、誰か。

「この話を聞いて、お前がどう思うかは知らない。俺はお前よりもお前を知るが、しかしそれはあくまでも今までのお前であり、今のお前だ。此処でお前が決意する事は、既に俺の知るお前ではない。だから後は、お前に任せる」

何処からともなく、彼は煙草を一本。取り出した。

そして僕に、それを向けた。

「お前もいるかい？」なんて嘘みたいに、彼は子供の様な笑顔で言った。

僕は頷く事もせず、それを指で抓む。

晴れ晴れした、男の顔。

強張っている感じのある、自分の顔。

「話は此処で終いだよ。俺の役目はこれで終わり。あまりにも苛々する。あんまりにも不愉快極まりない。だから俺が居た。だから俺たちもいた」

ライター音が、部屋に響いた。ただそれだけだった。

彼の啜る煙草が、じりじりと、切なさだけを掻き鳴らす。

僕の手にある煙草が、じりじりと。事の重要性を主張する。

「一服したら、俺もお前もさよならだ。今生のさよなら」

「そうみたいだ」

久しぶりに出た言葉。でも、僕はよくよくわかった気がする。

釋りレーであったとしても、過去の僕が通った道のりだ。だから知ってる。

それから無言で、僕と彼は、静かに煙草の煙を燻らせる。
会話なんて、いるもんか。見覚えのある顔、当たり前だ。
何せ僕等は、一心同体。だから僕等は、互いに知り合う。
成程、禰か。我ながら、良い事を聞いた。僕は過去から禰を貰った。すると僕が、過去になる。
過去になったら役目は終わりだ。未来に禰を渡せばいい。未来がその禰を受け取るかは、僕には
わからない。ただし、過去からは確かに。僕まではしっかり。禰が回って来たのだけはわかった。
。何せ目の前に、居るのだ。

過去の僕が。

男の煙草の火が消える。

「俺はそろそろ行くよ。お前に認識されたから、俺も死ぬるらしい」

「大丈夫だよ。“俺”がその仕事、引き継ぐから。あんたはゆっくり休めばいい」

“俺”の言葉に、あいつはゆっくり、手を挙げる。

いつしか現れた、扉が二つ。あいつの前に一つ。俺の背に一つ。

あいつは扉に手を掛けて、やっぱりいつしか現れた灰皿に、火の消えた吸い殻を捨て、何も言わ
ずにノブを握ると、扉を開けて消えて行く。そうして俺は、“過去の俺”であるあいつの、最後の最
後を見送った後、踵を返して歩みを進めた。目の前にある扉は、真っ白でしかない部屋の中。唯
一と言って良い程に真っ黒。

今まで着ていた俺の服は、黒から白へと変色していた。やや自嘲気味に笑ってみて、ああ、なる
ほどな。と、思わず呟く。

「こうやって、俺は俺に禰を渡すのか。成程成程」

わかったからこそ余裕を持てる。片肘張って、気張るなかれ。故にそれは、素直な俺だ。

ノブに手を掛け、戸を開けた。

待っているのは、真っ白な部屋。中に居るのは、真っ白なソファに腰掛けた、黒い背広を着た
俺で。だから俺は、気付かれる前にソファへと腰を掛けるのだ。

「ようこそ。この何もない、不愉快な部屋へ」

台本のない台本。繰り返される事象。たった今聞いた、俺からの受け売り。

死に逝く俺の――反逆だ。



小さな頃から。思えば周りの顔色ばかり伺っていた様に思う。いつもいつも、家族や周りからはいい子ちゃんと思われていなきゃダメだって、そう思ってた。当然、それは今でも変わってない。今にしてみれば、以前は多分臆病過ぎて、必要以上だったなって、そう思うけど。でも、だからと言って、今までずっと貫いてきた生き方を、いきなり変えることなんて、少なくとも私には出来ない。そこまで器用だったら、最初から人の顔色ばかり伺う必要、ないんだろうから。試してみたって、良いことなんてちっともなかった。

時々、友達の話の聞いたりとか、テレビに映っている人たちが、あんまりにも自由に生きてるものだから、やっぱり「いいなあ」なんて思うことはあったけど、それでも、私は今のままで、変わる事なんてないって、わかってる。そんなわたしを「諦めてる」とか、思う人はたくさんいるかもしれないけど、でも、ずっとこうやってきたし、寧ろそれ以外のやり方を知らないから、だから私は恐らく、変わる事なんて出来ないんだ。って、思う。結局、私は現状維持でいいやって、どこかで甘えているんだろうなってこともわかってる。今の自分から、本当は変わる気がないってことも、薄らと自覚していた。それでいいやって、思っている。変わるって事は、今までの自分を捨てるってことで、それがどうにも恐ろしいなって、きっと私じゃないんだろうなって、そう思うんだ。

ただ、それだけ。

高校時代。この性格が祟ったことがあった。クラスの中の、女の子たちの集団っていうのは、結構怖いものだ。本当に、些細な一言で人間関係が一変する。恐らく、そういった悩みのない子って、本当に、ほんの一握りしかいないんじゃないかな。わからないけど。

私のクラスには、勉強がすごく出来て、男女関係なく、みんなから慕われてる女の子がいて。例えば学級委員とか、生徒会とか、そういうのに入ってそうな子。活発だったし、何よりさばさばした、話しやすい女の子。人気者っていえば人気者だったわけだけど、全員が全員、彼女のことを好きでいるって事はなくて、当然彼女のことをよく思わない子だった。不思議と、そういう子たちはそういう子たちだけでグループを作ってた、更にその中に細かなグループがあった。

クラスを中心になっている彼女・・・まあ、その子をAちゃんとして。そのAちゃんを凄く嫌っていたのが、Bちゃん。当時Bちゃんは大学生くらいのお兄さんたちとよく遊んでたらしくて、派手な感じの子だった様に思う。彼女の周りには、やっぱり派手な格好をしたい子たちが集まっていたし、周りも、Bちゃんたちのことを一括りに扱っていた。

確か、一年生の終わり頃だったかな。冬休みの最後の方。一人で買い物に出かけたら、偶然Bちゃんたちと会った事があって。勢いに負けて彼女たちと遊ぶ事になった。私としては特定のお友達って少なく、どっちかと言えば引っ込み思案だったから、なんとなく周りに馴染めずに

いたから、誘われた時はちょっとだけ、嬉しかった。だからついていったんだと思う。ゲームセンターに行ったり、一緒に服を見たりして遊んだ私たちは、ファミレスに入って夕ご飯を一緒に食べる事になった。そこで、彼女たちはAちゃんの悪口を言い始めて、私に同意を求めてきた。私も、少しだけ・・・便乗しちゃった。Aちゃんは真面目すぎるんじゃないかなって思ったし、何よりその場の雰囲気賛同しなきゃいけないかなって思ったから、頷いたり、一緒になって話してた。当然、だからと言ってそこまでAちゃんの事が嫌いだった訳でもないし、寧ろ真面目で、凄くしっかりした子だなんて思ってたから、そこまで酷いことは言わなかった。賛同を求められたら頷いて、そうだね、なんて返しながら笑って・・・。今にして思えば、結構酷い内容でも、笑っちゃってた自分が恥ずかしいな、と、反省しているのが、これ。

春になって、クラス替えをして。でもやっぱりこの構図は変わることはなかった。私と、AちゃんとBちゃんが同じクラスだったから、だと思う。

二年生になって暫くした頃、生徒会に推薦された私は、Aちゃんと一緒に役員に立候補した。特に他意はなくて、本当は人前に出るのが嫌だったけど、折角推薦してくれた人がいるし、その人の気持ちを無下には出来ないなって思ったから、立候補しただけ。生徒会役員を決める選挙の説明なんかで、放課後やお昼休みにAちゃんとよくよく一緒になる事が増えた私は、突然、Aちゃんにある相談を持ち掛けられた。

「Bたち、最近学校休みがちでさ。日数とか大丈夫かなって思うんだよね」。いきなりの相談だった。私は「やっぱりAちゃんって真面目だな」って思い、同時に尊敬にも似た感情を抱いた。四、五か月くらい前、冬休みに聞いていたBちゃんたちが言っていたAちゃんへの悪口を、私は知っている。何せその場において、私も一緒になって、その時の雰囲気だけに吞まれて、悪口を言っていたのだから。それを知ってるのか、知らないのか。どちらにしても、AちゃんはBちゃんたちを凄く心配して、私に相談してきたみたいだった。当たり障りのない答えをしながら、この時の私は、Aちゃんへ、心の中で何度も何度も、頭を下げていた。ほんの少しでも、彼女の事を悪く言った自分が凄く醜くて、泣きそうになりながら。

二週間が経ち、選挙は無事に終わって、私とAちゃんは、晴れて生徒会役員になっていた。その間も、Bちゃんたちは学校には来なかった。担任の先生は特に気にする様子もなく、クラスメイトも何を言うでもなく。ただただ淡々と、日々を過ごしている。

Bちゃんたちが来ないことを心配してるのは、私と、そしてAちゃんだけになっていたのは、さすがに驚いた。クラスの中には、Bちゃんたちと一緒に騒いでいた子たちがいたけれど、心配する素振りを見せなかった。初めからそこにいたかの様に、最近まで悪口の種にしていた子たちと、仲良く昼休みを過ごしている。ただ――。

私は彼女たちの行動を否定する事なんて、出来ないのだ。だって、私自身、理由はどうあれ同じことをしているのだから。だから吃驚しながら、ああ、多分私も彼女たちからこういう目で見られているんだろうな。なんて思って、その光景を見つめていた。

ある日の事、担任の先生に用があって職員室に入ると、先生が誰かと電話しているのが見えた。何やら深刻そうな話をしている先生は、言葉を遮られる形で電話を切られたらしい。「聞いて

るのか」と言ったり「もしもし」と何回か言った後、ため息交じりに受話器を下すと、私に気付いてこちらを向く。

「どうした？」

「あ・・・出席簿を・・・お返ししようかと」

「ん？ ああ、そうか、教室に置きっぱなしだったな。悪い悪い」

私の差し出した出席簿を受け取った先生が、踵を返して自分のデスクへと向かっていく。初めはどうしようか悩んだけれど、私は勇気を出して声をかけた。

「あの・・・！ 今の電話・・・」

先生は、最初は少し口籠ってはいたけども、しばらく考えてから、電話の事を話してくれた。電話の相手は、Bちゃんだったらしい。出席日数が足りず、三年への進級が危ないから、とにかく学校にくるように。と説得する為に、電話をしていたそうだ。

更に、ここ最近、先生はBちゃんに何度か学校に来るように説得をしているらしい。が、先生の言葉を聞く訳もなく、彼女は一切学校には姿を現していない。と、先生は少し考えながら、私の顔を見て、言った。

「お前・・・そんなにあいつと仲良くは、ないよな」

「あいつって・・・Bちゃんですか？」

先生は頷いた。その表情があんまりに真剣過ぎて、だから私は冬休みの事を話してみる。

偶然外であったこと。少しでも、彼女たちと話した事がある事。後ろめたさがあったから、Aちゃんの悪口は、話していない。ずるいな、自分。なんて思いながら、やっぱり、難しい顔をして考え事をしている先生の顔を覗き込んでいた。先生は暫く考えてから、私の肩に手を置いて、真剣な顔のままに言うのだ。

「Bを説得してくれないか」って。あまりに真剣で、あまりに断りづらい雰囲気、だから私は、半ば無意識に、首を縦に振っていた。

放課後。私は冬休みにBちゃんたちと一緒にいったお店に向かった。ファミレス。

彼女にはメールを一通、『話があるからこの前一緒にご飯を食べたお店に来て欲しい』とだけ送って、後は電話をすることもなく、催促のメールをすることもなく、ただひたすらに、待っている。待っているだけだった。実際、会ったところで何を言えばいいのか、私にはわからない。手元にあるグラスの中、氷をストローで回しながら、頬杖をついて、窓を眺める。

ふと、考えてみた。

生まれてから、自分の記憶がある時間の中で

私は何を一一自分から言った事があるだろう。

思えばいつも、誰かの言葉に倣(なら)っていた。誰かの行動に従っていた。誰かの判断に身を任せていたし、皆の行動の中に埋もれていた。決して幸せだった訳ではない。どちらかと言えば、必死だった。兎に角生きる事に、何より皆に白い目で見られない為に、必死に生きていた。ただの

それだけ。お母さんや、お父さんに我儘を言った事はない。怒られるのが嫌だった。兄弟で喧嘩をしたこともない。唯一の兄弟が私を嫌うのが怖かった。友達と言い合いをしたこともない。その場の空気が澱んでしまうから。

私はどこまでも、自分がなかった。

Aちゃんが、眩しかった。

Bちゃんが、羨ましかった。

正しく生きて、意見を発し、皆から好かれているAちゃん。

気に食わない、と思い、自分の気持ちに正直に生きるBちゃん。

私は両方とも、出来ないでいた。恐らくは、これからもそんなことは出来ない。誰かの顔色を窺って、皆から嫌われたくないと、びくびくしながら生きていくんだ。我儘も、自分の意見も、絶対に言えないだろう。でも、だからこそ。

あの二人の近くにいる、私も幸せになりたいなって。この時は、思った。私が無理でも、せめてこの二人が、自分に正直に生きているのを、間近で見たい。出来れば、この二人には仲良くしていて欲しいと願った。そのくらいの我儘を、私は抱いた。せめて、このくらいの我儘は思っ
ていてもいいんじゃないかって、そう、考えた。

曇っていた外が暗く。ふと、街路樹が、不自然に揺れる。左右にではなく、縦に。

次第にそれは、規則性をもって。縦に揺れだした。

乾いているコンクリートのグレーが、黒に近い灰色に。

目をやっていた窓ガラスに、不思議な模様が刻まれる。

雨が降り出していた。

お世辞にもあまり大きなお店とは言えない、ファミレスのドアが開く。何の気もなしに振り返った私の視界には、店員さんと、Bちゃん。手には傘が握られている。

辺りを見回した彼女は、私の姿を見つけると、怖い顔をしながらテーブルまでやってきて、私の反対にあるソファに、乱暴に、腰を沈めた。

「あんた馬鹿じゃねえの。誰の命令？」

「・・・命令じゃ・・・」

「セン公？ それともA？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

矢継ぎ早にやってくる、彼女の質問。怒っているのか、Bちゃんの顔が赤かった。

「あんたも学校ダグって思う事あるだろ？ ちょっと感じが違うからって、白い眼で見られてさ。馬鹿にされてさ。そんなんウゼーなって、思う事あるだろ！」

最後は、勢いで言っていたみたい。テーブルを思い切り叩き、身を乗り出して私に顔を近づけて

。何も言えなかった。怖かった、のもあるけど、それよりも、言葉が出ない、って言った方が、この時はあってたと思う。

「だから学校・・・もう行きたくないんだよ。ママに相談したら、「やめれば？」って。だからもう、行かない・・・・・・・・」

自分が熱くなったのが恥ずかしくなったのか、声を小さくしながら、背もたれに寄り掛かって、Bちゃんは鼻で笑いながら、私にそう言う。本心なのかは、わからない。けど、私にはどこか、寂しそうな、辛そうな、そんな表情に見えた。

「誰の命令かは知らねーけどさ。そういう訳だから。私に何言ったって無駄だよ。早く帰んな」
「えっと・・・・・・・・あのね」

Bちゃんの言葉を遮る様に、私が慌てて言葉を発する。終わって欲しく、ないから。それがよっぽど吃驚したのか、Bちゃんは目を見開いて、私の言葉を待ってくれた。

「私・・・・・・・・あの・・・・・・・・友達、少なくて」

「知ってる」

「・・・・・・・・うん。それで、ね？ あんまり友達と学校以外で会った事・・・・・・・・なかったんだ」

「・・・・・・・・それが何？」

「あの・・・・・・・・ね。Bちゃんたちが一緒に、此処でご飯、食べてくれた時にさ。私の事、誘ってくれた時、さ。嬉しかったんだ・・・・・・・・」

Bちゃんは、静かに聞いてくれた。何も言わず、私の顔でも、窓の外の風景でも、店の中でもなく、テーブルだけを見つめて。静かに、ずっと口を閉ざしたまま、私の言葉を真剣に、聞いてくれた。

「今まで、私・・・・・・・・ちゃんと自分の意見を言った事、なくて。それで・・・・・・・・それで・・・・・・・・えっと。でも、なんだかAちゃんとか、Bちゃんとか見てて、良いなって・・・・・・・・。凄いなって、思ってた」

「・・・・・・・・Aが凄いなってのは、皆言ってるじゃん。ズルいしムカつくけど、でもあいつが凄いなってのは、私も・・・・・・・・認めてる」

「違うんだよ。Bちゃんも、私からすれば、凄いの。だって、ちゃんと自分の正直な意見、言えるから。だから・・・・・・・・良いなって」

やっぱりBちゃんは、何も言わなかった。ただ静かに、やっぱりテーブルを、見ている。

「Bちゃんに、声かけてもらって、凄く嬉しかったんだ。だから、さ。その・・・・・・・・周りの皆は分からないけど・・・・・・・・えっと。私は、学校に来てもらいたいなって」

静かになった。

まるで誰もいない場所かなと思うほど。音もなく、色がない。そんな時間が、ずっとずっと続いた。するとBちゃんが、徐に店員さん呼んで、注文をする。

「あんたいつから此処にいるの？ 私服じゃないって事は、家帰ってないんでしょ？」

「・・・・・・・・放課後から、ずっと」

ため息をついた彼女。店員さんに注文をすると、私の方を向いて言った。

「ほら。あんたも晩飯頼みなよ」

「え、だって私あんまりお金……」

「いいよ、奢る。私今月結構バイト代入ったから。一食ぐらいなら」

躊躇いはした。でも、お言葉に甘える事にして、私はグラタンを頼んだ。

「……ごめんね」

「どうせ今晚は私、飯なかったし。ママが彼氏とデートに行くって、お金だけおいてどっか行っちゃったからさ」

驚いた表情の私を見て、Bちゃんは自分の家の事を、少しだけ、私に話してくれた。お父さんが、いないそうだ。お母さんは、頑張っって一人でBちゃんを養ってるらしい。だからBちゃんも、アルバイトをしながら少し、お金を家に入れているんだそうだ。学校を休むのも、アルバイトの都合、らしい。いろいろと話をした私とBちゃんは、ご飯を食べた後、店を出る。雨はすっかり止んでいた。

「なあ！」

店を出たところで、私はBちゃんに呼ばれた気がして、足を止める。

「……何？」

「学校、明日は行くよ。だからあんたも、普通に来いよ。私がいたのに、あんたがいないんじゃ……なんでもねー。ばいばい」

途中で言葉を止めて、Bちゃんは踵を返す。呼び止めて続きを聞こうか迷ったけど、それはやめた。私も家に帰る事にして、足を進める。と、思い出してバッグから携帯を取り出し、メール画面を開いた。送信先は、Aちゃん。

『お話したら、Bちゃんは明日学校に来てくれるそうです。また明日、学校でね』

既に真っ暗になっている帰り道。携帯の画面の光がぼんやりと、辺りを照らしている。久々に、気分がよかった。私でも誰かの為に、何かが出来てるって、そう思ったから。

Bちゃんは必ず、明日学校に来てくれるだろう。私が頼まれた事は、ちゃんと果たした。それに、私の思いも、少しでも、Bちゃんに伝わってくれたんだと、思う。大きく伸びをしたくなったから、周りに人がいないことを確かめて、足を止め、伸びてみる。

ああ——初めて 人生って楽しいなって、そう思った。

翌日。約束通り、Bちゃんは学校に来てくれた。慌てて彼女の近くに駆け寄った私は、精一杯のお礼を言ってみる。ありがとうって。そして、茶封筒を彼女に渡した。

「……ん？ なにこれ」

首を傾げるBちゃんに、私はこっそりと、小声で、周りに聞こえない様に言った。

「あの……昨日のご飯のお金。Bちゃん家が大変だって、聞いちゃったから」

呆然とした顔が暫く続いて、しかし突然にBちゃんが大声で笑い出す。

「あっははははは！ あんた馬鹿じゃないの？ 良いって言ったじゃん」

「え、あ……でも」

「でもじゃないって。私の事は気にすんなよ。ほら、私もさ。正直言って嬉しかったんだ。だからその……お礼」

突き返された茶封筒。私は少しくすぐったい気持ちになって、それを自分のバッグにしまおうと踵を返す。と――

「なんだよB。あんたまだ学校来てたんだ」

大きな声で、Bちゃんを呼ぶ声がした。吃驚してBちゃんの方を振り向こうとした私の顔に、ビニール袋が当たる。固い何かが私の額に当たり、痛みが走った。

「ほら！ お前が避けたから『どっちつかずのダメ子ちゃん』に当たっちゃったよー」

「……あんたら！」

「大丈夫？」

痛くて思わずしゃがんだ私に、Aちゃんが駆け寄ってきてくれた。

「あいつは関係ないじゃん！ 何やってんだよ！」

「うるせーな。あんたが来るからいけないんだろ？ あたし等この前優しく注意してやったじゃん？ ウゼーから、学校くんなって」

Bちゃんは――虐められていた。

私も、先生も、Aちゃんも、クラスの皆も。そんなことは全く気付かずに、Bちゃんに無理に学校へ、来させてしまった。私は額の痛みより、その事が辛くて、涙が出てきた。

何を浮かれていたんだらう。私の我儘の所為で、折角仲良くなってくれた人たちを傷つけて。私は一体何を――ふわふわと、甘えていたんだらう。

「『どっちつかずのダメ子ちゃん』、あんたホントダメ子だねえ……Aの悪口言ってたと思ったら、今度はBの事も嵌めたんだ。あたしらあんたに言ったじゃん。Bが今度学校来たらただじゃ済まさねえって。知ってて呼んだんだろ？ Bが嫌いだから」

「え……違――」

「うっそー。こいつマジひでー！ あはははははは」

Bちゃんたちとよく遊んでた、彼女たち。確かに、おかしいな、とは思った。仲良かった子が学校に来なくなって、心配じゃないのかなって。でも、まさか彼女たちが、Bちゃんが学校に来なくなった一番の原因だったなんて、誰が判るだらう。そして今、すべてを私の所為にして、笑っている。Bちゃんも、Aちゃんも、その場にいる皆も、私を向いていた。軽蔑かもしれない。もしかしたら、もっと違う感情かもしれない。兎に角私を見て、静かに、私を見下ろして……沈黙を、守っていた。

「そう……だったんだ」

Aちゃんが、立ち上がる。凄く残念だとでも言いたげな声色で。私の事を、見下ろした。

「……なんだよ。ほんとに嬉しかったのにさ！ 信じた私が馬鹿だったって事かよ！」

Bちゃんは、そう言い捨てて教室を走り去っていった。

全てを私の所為にした、彼女たちは。ずっとずっと、私のその姿を見て、笑っていた。

ああ、そうか。やっぱり私が何かしちゃ、いけなかったんだ。
私が我儘を通しちゃ、ダメだったんだ。皆、仲良くできたら良いなんて
それが叶うかもしれない、なんて。

そんな虫のいい話は、なかったんだ。

次の月。Bちゃんは学校をやめた。

あれから私は、学校の皆から避けられ、嫌われた。生徒会に入っても、先輩や後輩にも噂は広がり、私はいつしか、悪者として、陰であらぬ噂を流された。
見兼ねたAちゃんは、唯一私と仲良くしてくれたけど、でもそれだって、表面上だけだって、すぐにわかった。二年生の、夏。私の高校生活は、陰口と虐めだけの苦痛になった。
卒業するまで続いたそれは、完全に私を変えたんだろう。

卒業し、大学に入学しても、私は人との交流を避けた。なるべく誰とも話さない様に、陰の方に。端の方に、自らを追いやった。もう、誰にも何も思われぬ様に、後ろに後ろに、下がっていた。

大学を卒業した私は、今、就職している。お父さんとお母さんは、特に何も心配せずに、私を笑顔で送り出してくれた。就職と同時に実家を出た私。ひとりぼっちのままの私。ある日、休みに一人で買い物をしていた私に、彼が声をかけるまでは。

彼は、とても自由な人だ。彼は何か、夢を持っているらしい。私、あまり難しい事はわからないけれど、それでも彼は、私にすれば輝いて見えた。同時に、孤独しかないと思っていた私に、希望をくれた。だから私は、彼を大切にしなきゃいけないと、思っている。
思っているけど、しかしそれだけでは、生活なんて出来ない。彼は定職についてなくて、だから生活するには、私が稼がなければいけないのだ。

帰り道。私はバスに揺られている。今、会社の帰り道のバスの中。何故だか、高校時代の事を思い出していた。椅子に座って、くたびれたバッグを膝に抱え、無機質に流れる光の川を、ぼんやりと眺めている。輝いていた彼との暮らしも窓の外の景色と一緒に一緒だった。でもそれは、数年もすれば消えてしまうものだ。この光の川とおんなじで、いつかは消えて、なくなってしまう。
自由なのと、楽をしているのは、違うのだ。

彼が私の家に来てから三年。自由だと思っていた彼は、ただ楽をしているようにしか見えない。だから私は、恐らく彼の『彼女』ではなく、彼が生活をし、生きていく事にとって、『必要な物』でしかない。くたびれたバッグに一度、目を落とし、再び窓へと目を向ける。タイミングよくトンネルに入ったからだろう。私の顔が、そこにあった。

バッグと同じくらい、くたびれた顔。もう、逃げてしまいたいと思いつつも、そんな我儘が通らない、と、諦めてしまっている瞳。ガサガサにくたびれた肌と唇。必要最低限だけの化粧。髪

は適当に、邪魔にならない程度に止めてあって。

ああ、私は何を しているんだろう。

最近、帰り道はいつも、そんなことを考えている。決められた時間の、決められたバスに、決められた様に乗る、決められた椅子に座って、決まった風景を眺める。決まって同じ自分の表情を見て、決まった様に同じことを思う。

決まった停留所で降り、決まりきった道を歩いて・・・・・・決まって彼に、殴られる。

ああ、私は何故 こんなことをしているだろう。

そんなことを考えていけば、いつしか目の前にはドアがあった。

私の家。憩いのない部屋。恐怖と苛立ちしかない空間。また今晚も、彼がいる。

そう考えたら、おかしくなって笑っていた。薄ら浮かべた笑顔は、自分でも意識をしていない顔。楽しいからの笑顔じゃなくて、もうどうしていいかわからずに浮かべた、空っぽの笑顔。ノブを捻って、扉を開けた。

「・・・・・・・・・・ただいま」

「おい、何笑ってんだよ」

始まる恐怖。痛みと、苦痛。私はそれを、自分の腕を噛んで耐える。

何もかもが終わって

彼が小さく呟いた。

「もう駄目だ。死のう」

「 」

そっか。私はここで、救われる。

痛みは、一瞬だった。

薄れていく意識。 その中で。

ただただ両親に

謝っていた。



私はしががないサラリーマンだ。中学、高校と必死に勉強し、大学まで走り抜けた。大学では、それなりに羽目も外したがしかし、就職すれば再び駆け抜ける。懸命に周りにしがみ付き、何とか此処までやってきた。家庭を持ち、子供二人を育て、仕事ではそれなりの業績を重ね、大した役職ではないが、一応係長という立場にある。

別段、私自身を不幸だと思った事はないし、家内も息子も娘も、随分と私に尽くしてくれているとも思う。平たく言えば、家族には感謝をしていると言う事だ。

仕事もやり甲斐がある。決して簡単な仕事ではないし、立場や責任と言う、程よいストレスがある。部下も仕事をしっかりこなしているし、上司からの評価も悪くはない。

だから私は、決して不幸だとは、思わない。

しかし、他人から見れば、それはどうなんだろうか。

幼い頃から、私は人に強く物を言う事が出来ない男だったと記憶している。勿論、それが変わる、なんて事はないのだ。何より、変わる必要がなかった。人なりの楽しみがあって、人並みの生活をしていれば、自分の生まれ持った性質を敢えて変える必要性はないだろう。だが、幾ら自分がこう思っている、社会や、そして社会を構成する人間は変わって行くものだ。私が唯一会社で頭を悩ませているのは、新入社員である。

それなりに、人の上に立っている立場上。誰かの陰口や噂話と言うものは、案外簡単に手に入る。そこで聞いた話では、新入社員たちが私の事を噂している、らしい。

「どうにも腰の低いオッサンがいる。」のだそうだ。

私達にすれば、考えもつかない陰口である。会社という組織の中に居て、更には社会の構成要素として取り込まれた我々は、自らの意志を押し殺してでも、会社の為になる様に働くのが普通だ。どんなに腹に立つ事を言われても、押し殺し、笑顔で受け流さなければならない。理不尽な叱責を受けても、それを受け止め、改善しなくてはならない。

幾ら自分よりも年下であっても、上司や、または自分には出来ない仕事をする部下には頭を下げなければならないし、ご近所からの目を気にすれば、どんなに機嫌が悪くても、笑顔で挨拶をしなくてはならない。上司や取引先には笑顔で対応し、楽しくもないゴルフや、飲みたくもない酒を飲まなければならない。それが、付き合いであり、大人であり、社会である、と。私の上に立つ先人たちは言った。

私達が新入社員の時は、それは恐ろしい先輩たちに絞られたが、しかし彼等も、頭角を現し、追い抜いていく新入社員には諂(へつら)うより他に、無かったのだ。

人には様々な社会が交錯し、重なり合い、連なっている。その全てに対応すれば、自然、頭を

上げている時間の方が、多くなるのだ。

しかし人間と言うモノは、自分の意識する行動を、必ずしもとれる訳では、ない。

例えばそれは、先ほど挙げた会社の新入社員。彼らは私の事をよくは思っていないし、例えばそれは、大事にしようとして心に決めていた家族に対しての、自分の態度だったり、だ。

家内とは、大学のサークルで知り合った。私が猛烈にアプローチをした事を未だに覚えている。最初は断られていたのだが、私がいかに何度も告白をしていたのが鬱陶しくなったのか、彼女は渋々了解してくれた。

付き合ってみれば、最初は遠慮気味で、距離を置いていた彼女も次第に打ち解けてくれて、私たちは屢(しばしば)会っては食事をしたり、映画を見たりして遊んでいた。

私の方が三つほど歳上であり、先に卒業した。今務めている会社に就職し、仕事と恋とに追われる事となった訳だが、しかし彼女は私をよく理解してくれた。この頃から、私は彼女と共に生活する事を決意し、彼女にその旨を伝えた。思った以上に喜んでくれたのは、未だ記憶に新しい。こうして、私と家内は同棲を始めたのだった。

所謂エリート組として当初期待されていた私だったが、しかし思うような仕事が出来ずに出世の道からは外れる。とはいえ、やはり当時は学歴社会全盛期であり、初任から手取りが多かった私は、それなりの生活を送れた。共に住んでいた彼女にも、恐らくは満足のいく生活をさせてやれたはずである。

彼女が卒業すると同時に、私たちは籍を入れる事になった。相手方のご両親に挨拶をし、私の両親に彼女を合わせた。特に反対されることもなく、私たちは結婚したのだ。

家内には内緒にしていたが、結婚資金を貯めていた甲斐もあり、それなりの結婚式を挙げる事が出来た。これには双方の両親、彼女、友人たちも大変驚いてくれたので、少しだけ胸を張っている。

仕事もそこそこ、家庭を持って、それこそ順風満帆だった当時だ。

当時は女性が働く、という風習が今ほどに色濃くなかった為に、家内は専業主婦をしたし、彼女が働かずとも、家計は十分に余裕があった。

私が三十になる歳。二人が望んでいた第一子が誕生する。女の子だった。

彼女も私も、大変喜んだことを覚えている。当時、私は一度落第した出世街道に返り咲いていた。結婚を期に、今までの考え方を改めたのだ。自分の事よりも、誰かの事を考えるようにした。上司に嫌味を言われても、取引先に無茶な注文を受けても、ただ只管に頭を下げて、懸命必死に業績を伸ばしたのだ。だから、それなりの役職をもらっていた。が、娘が二歳になった年、すべてが一変する。

社会の在り方が、変わり始めていた。それは、私の今まで積み上げたものの、その全てを手放すという事に直結していた。景気が転向し、株価が軒並み降下していく中、会社の方針は『先手』。即ち、来(きた)る将来の先駆けとなるべく、人事を一新したのだ。

業績、性格や家庭環境と言った全てを鑑みて、今ある人事を再編する、という社内方針は、無慈悲に私や同期、上司や先輩方を切り捨てていった。同期入社した二百六十八人の内、解雇対象者が八十一名。降格対象者が百七十二名。降格候補者が十五名。大手企業としての地位や、当時の

マンモス採用を反省した行動との声明をマスメディアに発表した当時の代表取締役は、続けてこう、公言したのだ。「次代のビジネスモデルを目指す」と。

降格処分を受けた私は、まだ良い方なのだろう。入社からずっと互いの夢を語り合った男たちの殆どが、突然の方向転換に振り回され、或いは振り落されて会社を去って行った。

同時期、家族が一人増えた。家内と娘は喜んだが、私は複雑な気持ちであった。収入が減り、会社がこんな状況で、果たして自分たちにこの子が育てられるのか。この時期生まれた息子が掴まり立ちをする頃くらいまで、私の頭の中はずっと、この事ばかりだった様に思う。同時に、この頃から、私の中で不和が始まった。

昨日まで慕われていた筈の部下たちの多くが、私の上司となった。今まで築き上げていた取引先は全て上司に奪い取られ、私の業績は悪化。私は徐々に卑屈になっていた。その所為なのだろう。私は家族に当たり散らすようになった。幸せをくれた、私を支えてくれた家族に対し、私は次第に怒鳴り声を向ける様になったのだ。日々の柵(しがらみ)や辛さから逃げる為に、私は家族を無下に扱った。

我が家は常に、張り詰めた空気と、私の怒鳴り声、そして子供たちの泣き声と家内の「止めてください」と言う叫び声だけになっていたのだ。きっと当時の家内や子供たちには、私の帰宅は恐怖以外の何物でもなかっただろう。

何年経っても変わらない、私の会社の立ち位置は、次第に私の、仕事に対する熱意や意識を奪っていった。繰り返される毎日は、自分よりもずっと年下の部下や上司の叱責を受ける事だけであり、新しい顧客取得の為に、やはり自分よりもずっと若い、担当者に頭を下げる事ではなかった。街を歩けば、道行く若者に道を開け、道路の端を、俯きながら歩くのだ。誰の邪魔にもならない様に。そして家に帰ると、その鬱憤を晴らすかの様にして、家内を怒鳴り、娘を叱り、息子を怒る。辛かっただろう家族を思い、寝る前には気分を沈めた。気付けば明るく日の朝となり、また背中を丸めて会社に向かう。

地獄でしかなかった。辛いとさえも思わぬ程に。いつしか、何も考えない様にすれば、すっかり頭は空になって、だから極力、私は何も考えない様にした。それがせめてもの、現実逃避だったのだ。

それでも、年月は経つ。月日が経てば、案外にいろいろなものは変わっていくのだ。

地獄と思っている日々も、いつしか順化してしまうものだ。家族を怒鳴る事も、全てに遜(へりくだ)る事も、卑屈になって人と接する事も、何もかもが、生活の一つとして、私の意識下に埋め込まれていくのだ。気付けば私は一一白髪になっていた。ああ、そうか。そんな年に、なったのか。時間の感覚などはなかったのだ。此処まで懸命に、走ってきた。すると、ふと、気持ちが少しだけ、楽になったのだ。視界が開けた気がしたのだ。

いつもの様に出社する朝。台所で朝食の支度をしている家内に、声をかけてみた。

「今まで、すまなかった」

唐突に、そう思ったから言ったのだ。言おうと意識して出た言葉ではなく、ふとこの時、思いついた言葉だった。私のいきなりの言葉に、家内は料理の手を止める。

「・・・どうなされたんです？」

そりゃあ、そうなんだ。と、苦笑する。いきなりこんなことを言われれば、しかも、いつしか怒鳴る以外に言葉を発さなくなった亭主が、ある日突然、寝覚めでそんな事を言い出せば、誰しもが首を傾げるだろう。家内とてそれは、例に漏れる事もない。

怪訝そうな表情が、何よりの返答だった。だから苦笑を浮かべたままに、私は洗面台へと向かった。一応のところは、自分の思いを口に出来たことに満足しながら。

その朝以降、私と家族との在り方は随分と変わった気がする。

以前の、怒鳴り声をやめた。会社の事は、と割り切って、私は家族と一緒にいる時間を増やした。残業は出来る限りせず、なるべく定時に帰った。当然、接待の時はそういう訳にはいかないが。だから必然、家族全員で食事をする時間が増えたのだ。初めは困惑していた家族も、しかし次第に変わる。息子、娘が、私へと色々な話をしてくれた。学校の事、友達の話、それこそ色々な話を、してくれたのだ。毎晩のように、私は風呂場で一人、目頭を熱くしていた。これが本来の、家族たるべき姿なんだろう、と。今まで私は、本当に、何をやっていたのか、と。大の大人が、めそめそとべそをかき、決まって顔を洗って、気持ちを落ち着けた。不思議な事に、この頃から会社の業績も伸び始めていた。停滞していた商談が纏まったり、新規の顧客を大量に獲得したり。それこそ、上司に手柄を取られても、私の業績として残るまでに、だ。家族との団欒。仕事も上り調子。本当の意味で、幸せだった。順調で、何より充実していたのだ。が、恐らくは――今まで私がしてきた事に対する天罰が、下ったのだろう。この幸せは、僅か数か月だけの、夢のような時間だった。

家内が――おかしくなった。

突然の様に奇声を上げ、食事の最中に暴れだし、虚空を見つめて喋り出す。最初はふざけていたのかと思っていた私も、子供たちも、家内の断続的に続く奇行を、真剣に心配するようになった。家族で話し合った結果、週末に病院へと行く事に決めた。全員で病院へと向かい、医師の診断を仰ぐ。家内は、心を病んでいた。生まれてこの方、一度も大病を患った事のない私にすれば、初めての医師だった。医者と言うモノは、案外に無表情で、何よりも平然と、診断を下す。感情と云うモノを、解剖台か何かにでもおいてきてしまっているかの様に、虚ろな瞳で、私たち家族を見つめ、声色一つ変えずに、家内の病名を我々に伝えるのである。ドラマなどで見る、緊迫した感じなど、一切ない。

大丈夫です、完治はしないが薬で進行を遅らせる事も出来る。薬が効けば日常生活も暫くは維持できます。と。医師は平然とした様子で私たちに告げたのだ。

こうして家内は、病人となった。

帰り道、誰一人として口を開かなかった。家内も、私も、息子も娘も。帰りの車の中は、異常なほどに静かだった。頭が真っ白になった私が覚えているのは、握るハンドルの感覚が随分と遠くの方に感じられたのと、車内の怖いくらいの沈黙と、そして息子が只管携帯を見ていたのと、くらいだった。

家に帰り、家内を寝室に連れて行った。まずは落ち着けさせようとしたのと、家内を抜きにして

子供たちと今後の話をしなければならぬ気がしたから。家内をベッドに寝かせ、部屋を後にした私のところに、息子が携帯を手にとりやって来る。

「父さん。帰りからずっと、さっきの医者が言っていた病気を調べてたんだけどさ」
どうやら、息子は息子なりに、今後の事を考えていたようだった。私や娘が呆然としている中、息子だけはどうすればいいのか、必死に考えてくれていたらしかった。知らず知らずのうちに、しっかりと育ててくれた事に感謝し、同時に、此処まで子供を育ててくれた家内に、感謝した。扉越しに、思わず頭を下げる。

「下で話そう。結構・・・・・・・・・・深刻かもしれないから」
家内に聞こえない様に呟いた息子に促されるまま、私は階段へと向かった。

家内が宣告された病名は、はっきりとしていない。曰く「パーキンソン病の可能性がある。最悪の場合は、認知症の一つという事もあり得る。完治する事はなく、家族はそれなりの覚悟を固めるべき」なのだそうだ。

息子と共にリビングへと降りると、テーブルで呆然としている娘が目に入った。始めは声も上がらない状況だったが、しかし此処で沈黙している暇は、ないのだ。息子と二人、いつも座っている席へと腰を掛けた私は、意を決して口を開く事にした。

「・・・・・・・・・・母さんの事なんだが」
二人は静かに、私の顔を見ていた。涙を懸命に堪えているのが、私からでもわかるほど、瞳いっぱい涙を溜めて、例えば唇を噛み締め、例えばテーブルの上にある拳を固め、二人は私の言葉を待っている。

「父さんが仕事を辞めて世話をすることは出来る。しかし、そうすると生活が持たないんだ。出来る限りで構わない。お前たち二人にも、手伝って欲しいんだが」
「勿論だよ。お父さん一人に背負わせる訳には、いかないしね」

力なく、娘が言った。
「後で上司の人に電話してみる。多分、しばらくは休ませてくれると思うから」
娘は去年、就職した。随分と有名な一流企業。入社直後に才覚を現したらしく、上司から高い評価を得た、と、家内に自慢げに話していた記憶は新しい。やり甲斐のある仕事に就き、これから。と言う矢先の、出来事。それでも娘は、暫く仕事を休んでくれると云った。私は何度も頭を下げるのだ。申し訳なかった、と。ありがとう。と。

「俺はとりあえず、ゼミだけは行きたいんだ。他の教科は後でもとれるし。留年したって、卒業は出来るから。でも、ゼミだけはまずいんだ。落としたら」
「ああ。頑張って大学には行きなさい。母さんだって、きっと心配するぞ」
「うん。姉ちゃんばっかに、良いかっこはさせねえけどさ」
努めて、息子は笑う。自然、私たちは静かに笑みをこぼした。

息子は今年、大学三年生になったばかりだった。大して塾にも通わせてやれなかったが、懸命に自分で勉強し、いい大学に入学した息子。お調子者で、すぐに馬鹿をやらかすやつだと思っていたが、今朝から、父親である私よりも迅速に行動をする事が出来る、良い息子だ。今だって、

沈んでいる私と娘を、冗談で笑わせてくれた。

「兎に角、俺は来週にでも正式に休学届出すよ。ゼミだけで出ると、ちょっと変な感じにはなるけど、認めてくれると思うから」

どうしても落とすたくはない、ゼミらしい。息子が何を学んでいるのかは分からないが、しかし本来ならば、これは子供に任せる問題ではないのだ。だから少しでも協力したいと、そう思っって行動に移してくれるだけ、私は感謝をしなければならない。

「父さんも、なるべく早く帰ってくるよ。母さん、今は早い段階だから動けるが、その内一人で動けなるだろうって、お医者さんも言った。だからなるべく早く帰ってきて、母さんの世話をしなきゃいけないだろ」

こうして、今後の動きが決まる。娘は一度、涙を拭いて立ち上がると、夕飯の支度をしなくちゃ、と立ち上がった。それを聞いた息子も立ち上がり、買い物に付き合うと言って慌ただしく支度を始める。大きくなった子供たちは、此処まで遅しく育てていたのか、と、この日は一日ずっと、目を見張る事となった私。

「お父さんはお母さんのところにいてあげて。家の事は私たちがやっておくから」

「姉ちゃん！ 置いてくぞー」

「わかった、今行く！ じゃあ、よろしくね。お父さん」

「……………ああ、気を付けて来いよ」

笑顔でその場を去る娘。私も立ち上がり、家内のいる寝室へと足を進めた。

「……………入るぞ」

「はい」

扉を開け、ベッドに腰掛けている家内を見る。

「あいつら、さ……………気付いたらもう、大人なんだな」

「そうですね。パパがお仕事忙しくて気付いてないだけで、あの子たち、もうすっかり大きくなって」

穏やかな笑顔で、近くにあった写真立てを手に家内が言った。私は家内の腰掛けるベッドの、家内の横へと腰を掛け、少し照れくさい気持ちになり、視線を泳がせながら、言葉を探しながら、言う。

「俺が仕事仕事って、お前たちに辛く当たってる間……………お前が必死にあの子たちを、育ててくれたんだな。ありがとう」

「……………良いんですよ。知っていましたもの。私も。あなた、お仕事上手くいってなかったんでしょ？ だから子供たちにも言ってました。パパはね、本当はとっても優しく、頼りになる人なのよ、って。最初は二人とも、信じてくれなかったんですけどね」

笑う。苦笑だった。だから私も苦笑した。そうだろうな、と。あの子たちが、後々まで残るであろう意識が始まってから、私は家の中で怒鳴るしか、しなかったのだ。子供たちが一生懸命、親に愛されようと努力した事でさえ、私は見る事もせず、ひたすらに怒っていたのだから。自らの感情のみを、最も大切にすべき家族にぶつけていたのだ。

「でも、パパにこの前言われた言葉は、驚いちゃいました。いきなり「ごめん」だなんて。うふ

ふふ。ご飯を作る手を止めちゃいましたもの」

「・・・そうだろうな。いや、すまない」

「良いんですよ。さて、晩御飯、作りますから」

立ち上がった家内の手を、掴む。

「今日はあの子たちがご飯を作るんだそうだ」

「・・・・・・・・そうなんですか？ また急に、どうしたのかしら。あの子たち」

「たまにはお母さんを休ませてあげたい、だそうだよ」

私の言葉を聞いた家内の顔色が、急変した。

今までの、穏やかを絵に描いた様な彼女の顔が、私の知らない顔になった。

それは宛ら、鬼の形相だった。結婚してから何十年と共に暮らしてきた家内の、全く見たこともない様子に、私は思わず言葉を失った。途端、叫び出す。私の手を振り払い、辺りにあった物を手にすると、目標などは定めないかの様に、それを処構わず投げつけ、奇声を上げる。私は慌てて家内に抱き着き、動きを止めようと試みた。が、それ以上の力を絞り出し、家内は私を振り払った。

「どうしたんだ！ 何をそんなに――」

「私は病人じゃない！ 何が休ませてやるだ！ 私は普通なのに！」

自覚が、ないのだ。

緩やかに進行するその病気は、しかし確実に家内の脳を蝕み、満を持して――現れる。

表面化していても、家内は記憶を失っている訳ではないのだ。ただ、突然の様に怒りを制御出来なくなる。本来ならば、感情の起伏が小さくなるらしいこの病気であるが、医者に曰く、感情の起伏が小さく、少なくなったが為に、許容量以上の感情をコントロールできなくなる事がある。のだそうだ。例えばそれは幻覚として現れ、例えばそれは怒りと言う形で以て奇声を発し、そしてその情動に呑みこまれる様にして、奇行に至る。家内は、もう私の知る家内ではなくなっていた。

一頻(ひとしきり)暴れた家内は、肩を上下に揺らしながら呼吸をし、私を睨み付けた。

「あの子たちが・・・・・・・・あの子たちがそんな生意気な子に・・・・・・・・なったのは、あなたの所為ですから・・・・・・・・あなたの所為ですから！」

止めどもなく流れ出る怒りは、方々を彷徨いながら、辺りに拡散していたに過ぎない。が、それが今、こちらを向いた。その焦点が、一束になり、私へと向けられる。細かい事は分からないが、しかし恐らく、それこそが殺意と言うもの、なのだろう。私の体は自然、腰掛けていたベッドから立ち上がり、彼女との距離を取る事に努めていた。恥ずかしい事に、恐怖しかなかったのだ。恐ろしいとしか、思わなかった。

生まれてから今まで、これほどまでに身の毛が弥立った試しはない。

まさかそれを、自分の妻から体感させられるとは、誰が思っているだろう。

兎に角私は、恐ろしい形相でこちらを見る家内から、ゆっくり、ゆっくり距離を取った。合わせて家内が、一步、また一步と私との距離を縮める。殺意が、痛いほどに伝わった。同時に、この状況を作った、過去の自分を恨む。あんなによき理解者であった家内を、あんなに私を支えてくれた彼女を、此処まで変貌させたのは、他ならぬ、私なのだ。

「・・・待ってくれ。確かに俺が間違ってた。お前にすべてを押し付け、俺は逃げてきたんだ・・・・・・・・。自覚、してるよ。ごめん」

「謝ったって何が変わるの！ 私はおかしくなんてないわ！ そうやって、反省してるふりしてまた私を貶めるつもりね！」

彼女は、怒鳴る。初めての事で、私も気が動転した。どうすれば、怒りを露わにした彼女を宥める事が出来るのか。今まではどうしてきたのか。が、それが全く、頭に浮かばない。果たして彼女は、私にここまで怒りを向けた事があったか？ いいや、ないのだ。今の今まで、一度たりとも、怒ったことはおろか、文句ひとつ、彼女は言わなかったのだ。それが今、全ての怒りを噴出しているかの如く、文字通り烈火の如く、怒っている。

家内の憤怒はとどまりを知らず、私の胸倉めがけて飛びつく彼女の瞳は、既に光を失っていた。宛らそれは、両親の仇を見るような目で、私を見ている。

「あなたの所為で、私の人生はめちゃくちゃだ！ 息子や娘に異常者扱いされ、尽してきた夫にまで・・・・・・・・私の人生は、お前の所為でめちゃくちゃだ！」

彼女の怒鳴り声の後、私の腹部に痛みが走った。

家内の膝が、私の腹部に思い切りめり込んでいて、ああ、だからか、なんて、間の抜けた、それこそ場違いな思いを頭の中に巡らせながら、自然と手が、痛みの個所を当て、私は前屈みの様な体勢でもって、後退る。物言えず、ただただ家内の、狂気に満ちた顔だけを見つめていると、不意に扉が開く。廊下から、息子がひょっこり顔を出した。

「何バタバタして・・・・・・・・母さん？」

ゆっくりと、息子が見開いた目をそのままに、部屋へと足を踏み入れる。体を屈める私と、その私の前に力なく立ち、鬼気迫る表情で私を見下ろす家内。その様子を見て、息子が呆然としていた。無理もない話だ。息子よりも彼女との付き合いが長い私でさえも、啞然としたこの状況に、息子が対応できる訳はない。

「何やってんだよ、母さん！」

「うるさい！ こいつの所為で私の人生はめちゃくちゃだ！ お前たちだってそうだ！」

「とりあえず落ち着けよ母さん！」

半ば羽交い絞めにする形でもって、自分の母親を抑え込む息子。私はただただ、腹部にあった痛みも忘れ、その光景を、呆然と見る以外に術がなかった。

こうして、私たち家族の、不和と不協和と、混沌なる毎日と言う戦争が始まった。

しかし、それは決して長くは続かないものだ。全てが全て、総力戦なのだ。心身ともに、家内も、息子や娘も、そして私も、疲弊し、憔悴しきっていた。

これこそが、総力戦の恐ろしいところである。家庭内は、再び沈黙と、恐怖が充満していた。私が以前、この空気を作っていたのかと思うと、身の毛も弥立つ。あまりの重苦しさに、何度も気

が触れそうになった。事実、家内と二人の子供たちは、この状況を何年も続けていたのか、と、実感し、そしてそれを思う都度、目頭に熱いものが込み上げてくる。

これならば、成程どうして理解できる。

たとえ殺されたところで、文句など言えるのだろうか。いいや、言えないだろう。

だから家内が、あの形相で私を見ていても、今ならば、何も思わないだろう。

例え手に包丁を握っていても、恐らく私はその行動を受け入れざるを得ない。詰まるところで、既に、手遅れだったのだ。何もかも。

家内の事

家族の事

仕事の事

息子の事

娘の事

そして――自分の事。

その全てが、もう、手遅れだったのだ。

気が触れそう、だったでは、済まなかったのだ。何せもう、私は恐らく、気が触れているのだろうから。だからもう何度か、真剣に死を覚悟した。私が死を以て、家族に償う以外にないのではなかろうか。そう、思う様になっていた。

しかし、私が死んだとして、それは逃げにしか、ならないのだろう。今まで逃げ続けてきた私は、最後の最後まで、自分の愛した人への贖罪さえも、逃げるのか。それこそ、救われないのだろう。私ではなく、息子や、娘や、家内が。だから私は、その都度自らを奮い立たせ、日々を送る。

――筈だった。

何かが変化することは、案外に些細なところから、発生する。

それは例えば、何も変わり映えのない生活の一端から、始まる。

私が会社から帰宅した時、その前兆があった。息子と娘は、いない。恐らくは買い物にいったのだろう。将又息子は、大学だろうか。細かい事はわからない。が、とにかく、家には私と、家内

の二人だけだった。靴を脱ぎ、廊下を歩き、扉を開ける。リビングに入ろうとした私の目の前に、大きな荷物を持った妻が立っていた。

涙を浮かべ、ありったけの笑顔を浮かべ。

自分の、それこそ感情を全て押し殺し、家内は笑顔を、私に向けた。

冗談でも、大袈裟でもなく、その時、私の眼には、家内が女神の様に映ったのだ。

痛々しい笑顔を浮かべた家内は、毎日の張り上げる奇声が為に擦(かす)れてしまった声で、私に一言「おかえりなさい」と言う。返事をしようにも、なかなか声が出なかった。もどかしく、同時に、強引に今返事をすれば、私も涙をこぼしてしまいそうだったから。だから私は、力いっぱい一度、頷いてみせる。家内は更に、擦れた声で呟くのだ。

「あなた・・・・・・・・・・お疲れ様でした。ありがとう」

漸く、意味が解る。ああ、家内は・・・・・・・・・・彼女は。私たちの元を去るのだ、と。

椅子に置いてあるバッグの持ち手は、彼女の肩に既に掛っていた。それを少し持ち上げ、完全にバッグの重みを感じる状態にした家内は、ゆっくりと私にお辞儀をして、私の横をすり抜けていく。

待つて欲しいと、願ったから。

体が少しだけ、軽くなる。

引き留めた私は、引き留めたはずの私は(、、、、、、、、)、思わず息を呑んだ。何をしているのだろうか。

私は今、何をしているのだろうか、と。

引き留めるはずの、私の両手は――

妻の首に、食い込んでいた。

擦れていく呼吸音。

妙に熱を帯びていく妻の皮膚。

もがき苦しみ、彼女が引っ掻くのは私の手。

ゆっくり、妻のつま先が、地面から離れた。

手には、温かいのか冷たいのか、わからない感触が、一粒、二粒。

次第に、弱まる呼吸音

妙に感じなくなる、妻の体温。

痙攣し、そして彼女の命は、終わりを迎えた。

「ただいま母さん。今姉ちゃん帰ってくるからな。飯は――・・・父・・・さん」
車のキーで手遊びしながら玄関に到着した息子は、目の前に広がっているだろう惨劇に、言葉を失う。途端、私の視界が、ぼんやりと輪郭を失って、次に頬に、何かが垂れた。

「何やってんだよ！ 父さん！」

怒鳴り声。

「どうしたの？ 何をそんなに・・・・・・・・」

悲鳴。

「姉ちゃん！ 救急車！ あと警察！」

怒鳴り声。

体に衝撃が走るが、既に視界は輪郭を失っていて、何が起きているのかが分からない。

子供たちは、何をそんなに騒ぎ立てているのか。

全くわからなかった私が、状況を把握したのは、両の手首に手錠を掛けられ、家の外に出てからだった。

軽蔑の域を超えた――二人の子供たちの目が、ただ私を追っている。

足元には、家内の変わり果てた姿。

どうやら私が、家内を殺した様だ。



私たちが生活しているこの社会は、随分と他人事で溢れていると思う。物騒な事件が連日ニュースを賑わし、不況やら、政治家の政権争いやらなにやらと、学者や専門家が難しい話を、厳めしい顔で話し合う。例えばそれは、どうにも現実味のない話に聞こえたり、何処か他人事の様に思う。少なくとも、私は。だから今、会社に向かう準備をしながら、何となく片手間にテレビを見ている私と、テレビに映し出されてる“不可解な連続殺人事件”とは、やっぱり何の接点もない。恐怖は感じないし、私には関係のない話だ。

人殺ししか出来ない犯人は、可哀想だ。だけど、同情には値しない。何故それ以外の方法を自分で模索しなかったのか。それは、誰かに注目して欲しくてやっているのではないか。もしもそうなら、それは私の中では弱者に他ならない。

人殺しに殺された被害者は、可哀想だ。だけど、同情には値しない。何故人殺しに殺されなければならなかった。自分で少し気を払っていれば、もしかしたら殺されずに済んだかもしれないのに。そんな危険性のあるところや、危険な要素を自分で手繰っているんなら、それは単なる考えなしだと、思う。もしそうなら、それは私の中では弱者だった。

結局のところ、頼りになるのは自分を於いて他にはない。誰も助けてなんてくれない。今テレビに映っている被害者も、誰も身を挺して庇ったりなんかしない。結局は誰でも、自分の身が可愛いのだ。私はそのことを自覚し、だからこそ、人に助けなんて求めない。

順調に仕事の準備を整えた私は、テレビを切って家を出た。

私は、媚びを売り、“誰か”や、“何か”に諂(へつら)う事が嫌いだ。小さい頃から、それは何一つ変わっていない。人に媚びるのが嫌いだし、人に頼る事だって、完全に頼らない事なんて出来ないまでも極力ならばしたくない。

まだ自分で何一つ出来ない頃、両親から受けた恩は返してきているつもりだし、これ以上誰かの恩を受ける事は、したくないのだ。しかし、私だって鬼ではない。私が出来る事は、誰かの為に手を貸したいと思っているし、出来る事なら、誰かの為になる事をしていたいと思っている。

小学校に上がると同時に、私は母から家事全般を習った。可愛げのない子供だったな、などと、思うときもあるけれど、しかし、それが自分なのだと、それこそが自分の望む姿なんだと思うから、後悔している個所は、どこにもない。兎に角、私は誰の世話になるのも、誰かに助けてもらおうのも、嫌だという事だけは、小さい頃から何一つ、変わってなどいない。

高校に入ると、アルバイトが出来る様にあつた。私は高校に入学する前、中学校の卒業式の日、アルバイトの面接を受け、働き出した。

我が家は、言うほどに貧しい家庭ではなく、どころか寧ろ、その対極に位置しているだろう事は

、中学生の頭でも容易に理解する事が出来た。でも、自分の食費、光熱費、家賃や携帯代、学費や塾のお金を、自分で少しでも出したかった。

だから懸命に働いた。部活に入部しても、アルバイトが忙しくなっても、誰にも、何も、迷惑をかけない様に、誰にも縋(すが)らずに済むように、懸命に勉強し、働いて、生活した。

大学に行けば、何とも高校よりも負担が減った。時給は年齢と言う差異だけで上がり、授業は高校ほどに忙しくない。私はアルバイトと勉強を懸命に続けた。

卒業の年になると、講義の時間は減り、卒業論文を作る時間が大半になった。勿論、アルバイトも続けた。気付けば、四年生の後期。始まってすぐに、私の卒業論文は完成していた。提出し、就職活動に移ったが、すぐに内定を取り、私は希望した企業に就職する事となったのである。消化の為に講義を受け、単位を取って無事に卒業した私は、既に決まっていた企業に勤め出した。上司からの助言をその場で覚え、自分が出来る最良の選択や、最大限の努力によって、職場内での私の成績は、先輩方さえも追い抜き、私の地位はみるみるうちに上がって行った。例えば“可愛げがない”とか、または“生意気だ”と思われるだろう事は予想出来るが、しかし会社は(、、)私を認めたのだ。誰が何と言おうと、それが変わることはない。誰にも迷惑をかけず、最低限の指導を受け、後は自力で、私は今の立場を手に入れた。大勢の部下を持つことになれば、私が割り当てられた仕事だけが仕事ではなくなった。部下の悩みや、仕事の出来不出来を見なければならなくなった。それでも、私は楽しく仕事が出来た。いいや、楽しい、という言葉は、きっと適切ではないのだろう。生きる事に、楽しいという事はないのだ。問題なのは、何処まで自立して生きていくか、に集約されているのだと、私は思っている。当然、私の考えを誰かに押し付けるつもりは、ない。それこそ、「私は凄いんだ！」と、周りに媚びを売っている様だから。

人には其々の価値観や考え方があって、十人十色なのだ。答えなんてない。あくまでも私は、と言う定型である。媚びを売ってうまく世の中を渡っていく人もいれば、逆に正直すぎて損をする人だっている。何十人と言う部下を見て、それはつくづく感じる訳で、だから私はいつも、その人がしたい様にさせる。うまく事が運ぶように助言をするし、心からその人の成功を願っている。

気付けば私は、部署を超え、会社内でのご意見番になっている事も屡あった。表面には出さないけれど、私が自力である程度の事が、どこか周りが求めている以上の事が出来ている、という評価なのだろうと、私は内心、安心にも似た心持だったわけだ。

でも、何の因果か。今までの価値観を、今までの安心感を一気に打ち砕く出来事が、起こる。

ある筈がないと、高を括っていたのは事実だ。

でも、裏打ちされていない事実縋(すが)ったところで、何もないとわかっていた筈、だったのに。

それは、ある日の事だ――。

私は会社からの帰り道、一人の男と出会う。

何ともふざけた、ピエロみたいな恰好をしている男だった。早く帰りたかった私の横、ちらちらと視界に入り込む、どうにも厄介な男だ。始めは無視をしていた私も、男の影がどうにも気になり、同時に鬱陶しいと思ったので、思い切って足を止める。

「あの——」

「おかしな道化な貴女に捧ぐ、おかしな道化の小唄よ。聞いて御座来、足、止め下さい」

私の言葉は、かき消された。このおかしな男の、人を小馬鹿にしている様な、調子を付けた言葉によって。私の言葉は、押し潰された。しかし、私もここで食い下がる訳にはいかない。確かに面食らったが、怯んでいれば、ふざけているこの男の、思う壺と、考えたから。だから私は食い下がるべく、足を止めてピエロへと、体ごと向ける。

「一体なんなんですか！ それに、初対面でいきなり、私が“おかしな道化”？ 笑わせないですよ！ あんたに何がわかるってのよ」

「そこまで焦るな、急ぎなさんな。物事全ては順序があって、然(しか)らば其の手の質問は、ワタクシ、お道化た、おかしな男の、言葉、小唄を、聞いてから、お時間許す限りに於いて、ごゆるりすれば、良い唄」

「時間がないから言ってるんですよ！ おかしいんじゃないの？」

「其れなら、何より、貴女に比べ、ワタクシ自身が知っている。存じております、当たり前。ならばワタクシおかしいが、さても貴女は如何か知らん。他人がおかしい、おかしくないを、他人が決めるは、おかしな事か？ ええ、ええ、そうとも、おかしな事よ。ならば全員ひっくるめ、全員おかしい事にして、唄を進める事にすりゃ、誰もなんにも云えませぬ」

男は踊る様にして、私の横で調子を取った。得体のしれないこの男が、本当に男なのかどうかも怪しく、どころか、人であるかも怪しい。そう思ったから、私は口を閉ざしてみた。何か、危ない事があったら困るのだ。自分の身は、何より自分が守らなければならない。誰かに助けを求めるのは、即ち私が嫌悪する行為なのだ。だから私は、口を閉じた。話があるなら話してみろ、と。ピエロに挑戦的な目を向けながら。しかし恐らく、私の意図など意には介していないのだろう。ピエロは一頻、気味の悪い笑い声を上げると、私の腕を掴んで、やはり気味の悪い歩き方で、聳(そび)え立つビルとビルの間へと私を引き込んだ。思わず身を強張らせると、歪な形の仮面を取って、それを懐にしまう。

好青年——とでもいえば、恐らく聞こえはいいだろう。整った顔立ちが現れた。

帽子を取った彼は、今度は落ち着いた笑い声を小さく上げてから、握っていた私の腕をゆっくり離して、足元にある何かに腰を落ち着ける。

「いきなりで大変失礼しました。お姉さんはどうにも面白そうだから、つい声をかけてみたんですよ。ああ、ナンパとかそういうのではないので、ご安心を」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

随分と、綺麗な声で。私にそう言うと、懐から何かを取り出し、啜える。小さく何か爆ぜる音がして、煙が真っ暗な空へと一筋伸びる。驚いた表情をしまいと、なるべく強がって、私はなおも彼の顔を無言のままに睨み付けた。

「お姉さん。さっそくで申し訳ないんだけど、貴女は一つ誤解をしていますね。多分？ いいや、此れは確信だ。貴女は間違っただけの世界を作り上げている」

「・・・意味がわからないわよ」

「そうでしょうとも、何せ其れが正解だと、未だに思っている。皆から後ろ指を指されているにも関わらず、貴女は間違っただけの世界を、自分や世界すべてに、突きつけている」

言っている意味が、まったく分からなかった。彼はそんな私を気にも止めず、言葉が続ける。

「誰に迷惑をかける事もせず、誰に頼る事もしない。素晴らしい考え方ですけどね。其れは粗方間違えだ。そんな事が出来る人間は、恐らくこの世にはいない。どころか其れを、実現出来るなら、其れはきつともう、人間じゃあ、ないんですよ。着眼はよかったですけどね、着眼だけしかよくはない。即ち、間違えだ」

意味が解らないが、いきなり否定が入った。普段なら何気なく躲し、斬って捨てる、言わば“言われ馴れた言葉”が、どうにも突き刺さった。突きつけられているのではなく、私の胸に、しっかりと、突き立った。

「肝心なのは、適切であるか。適当であるか。適量であるか、過不足ないか。それだけです。僕の言う意味が解りますか？ 貴女の其れは、過度であり、不適切だ。過分なんです。此れは唯(ただ)の警告で、唯の道楽なんです。貴女がどういう未来に苛まれても、僕には何ら関係ない。最悪、貴女が飼い犬に手を噛まれ、出血多量で死んだとしても、僕は一向に構わないんです。恐らくは、「それ見たことか」と指を指し、貴女が今までなぎ倒して行った大勢の人と共に、大笑いをするだけです。唯、此れは言うなれば、貴女がどういう動きをするのか、と云う、随分と身勝手な探求心からの、言葉です」

思わず、カッとした。この言い草はあんまりではないか、と。私の考え方を否定するまでは、許すとして。私に共感出来ない事は、いいとして。しかし、この言われ様はなんだろうか。こんな言い方をされる様な事を、私はしているのだろうか。

だからこそ一違うと思ったからこそ、私は思わず声を荒げる。

「どういう人かなんて知らない！ でもね、あんたが生きて来た以上に私は生きて、この考え方を貫いてきた！ 何処の誰ともわからない子供に、私の生き方を否定される謂れもない！ それに、何その言い方！ どうでもいいならなんで私に声を掛けたの？ 人をモルモットみたいに言って！」

聞きながら、初めは少し吃驚した様子だった彼。が、途中から笑う。何がおかしいのか、再び不気味な笑い方で以て笑う。私を、笑う。

「そうですね。こんな子供に言われたくは、ないでしょうとも。そうですね。しかし事実だ。現実を言っているに過ぎないんですよ。其処に年齢の差異や経験則は関係ない。僕は結末を知っているだけで、何も貴女の生き方を否定しているつもりはありません。あくまでも僕が否定しているのは、そう、貴女自身だ。自信？ 経験則？ なんとも馬鹿げた言い分だ。他者との接触や介入を、双方共に否定し、拒絶する事は、即ち馬鹿でも出来る事だ。いいや、言い換えます。そして断言しますよ。其れは馬鹿にしか出来ない事だ。僕は少なくとも、貴女のように馬鹿ではない。無論、僕がおかしい事を前提として、ね。しかしこうも言える筈だ。貴女は異常である。此の世

続けた結果の彼、なのだろう。彼が去った後、私の両脚は持ち主である私の意思に反し、動かないままその場に崩れ落ちていた。力なく、ゆっくりと、私はその場に座り込んでいたのだ。

私はある、夢を見る。

それは些細な日常の風景であり、よくよく目にする光景だった。会社の自分のデスクにつき、仕事をしている私。周りには、当然部下たちが黙々と仕事をしている姿があった。私も私で、自分の仕事をしていると、其処に一人の女子社員がやってくる。神妙な面持ちで私の前までやってきた彼女は、仕事の事で相談がある。と言って、私を別室に呼び出した。何かと思ってついでに、彼女は私に向かってこう言うのだ。

「貴女は何もわかってくれない」

「貴女は何もわかってない」

「貴女は強い人間かもしれないけど、私たちはそこまで強い人間じゃない」

数多の言葉が私に向けて飛んでくる。怒りのままに、と言うほどの感情はなく、寧ろいつぞやのピエロの様に、無機質な声で、不気味な表情で、虚ろな目で、その女子社員は私に向かってそう言ったのだ。反論などは、とても出来そうな雰囲気ではない。尚も彼女の言葉は続く。

「貴女は成長しない」

「貴女は病気なのかもしれない」

「貴女では、きっと誰も救えない」

話すテンポは随分遅い。しかし、その緩慢な速度が、私にすると矢継ぎ早だった。

返事が出来ない。返答が出ない。反論出来ない。息苦しいだけで、それ以外の何もない。逃げ出したい気持ちになっても、私の体に自由はなく、足を進める事はおろか、身をよじる事さえも叶わなかった。淡々と続く、罵声とも取れない罵り。

気付くと私の眼には、涙が溜まっていた。久しぶりの、涙。

聞きたくないと、耳を塞ぎたくとも、塞ぐべき私の腕も、やはり自分の意思で動かす事が出来なかった。ただただ、私は立ったまま。棒立ちのままに、涙を懸命に堪えていた。

次の瞬間、私の視界には、真っ暗な自分の部屋が映る。誰も居ない、居る筈のない部屋。

じっとりとかいた汗を拭い、瞳いっぱい涙を溜めて、荒れていた呼吸を懸命に整える。漸く、その光景が夢だった事に気付いたのは、視界が変わってから暫くしてからだ。まだ辺りは暗く、しかし締め切ったカーテンの向こうは仄かに青い。時計に目をやると、針は四時よりほんの少し前。あんまりにも寝覚めが悪くて、とてもではないけど、もう一度寝られるような気持ちにはなれなかった。だから、何の気なく、テレビのリモコンを握ってみる。特に意味は無い。

ただ、少しだけでも気を紛らわしささえすれば、それでよかった。

テレビの電源を入れた私の前に、臨時ニュースの文字が躍る。それはいつぞやの朝に見た、不可解な殺人事件。どうやら犯人は、まだ捕まっていないらしい。特に何を思う事もない。警察がまだ犯人を捕まえられない、とか、そんな事は微塵も思わない。何より彼らは、私と同じ人間な

のだ。スーパーマンでも何でも無い。だから、捕まえられないからと言って、特に失望したりだとか、見下したりだとかをしようとは思わないのだ。

結局それも、他者を必要以上に期待するから思う事なんだと、思う。

始めから期待なんてしていなければ、失望することも無い。ああ、大変なんだなあ、くらいにしか、思わなくて済むのだから。私はぼんやりと、ただただテレビを眺めていた。こんなニュースでも、内容が内容であったとしても、私の気分は随分と紛れる。夢は随分と身近な事であったけど、今テレビで流れている事は、どれほど近所であったとしても、例えば知り合いが映っていても、他人事であって、自分とは何ら関係のない話、なのだから。この世のどこかで起こっている、何処にでもあって、私の日常には一切介入してこない話なのだ。現に、私がもし知っていて、私に直接介入してくる事があったとしても、それは私が解決すればいいだけの話であって、悲観をする必要性なんて、一切ない。

テレビはどのチャンネルも、不可解な殺人事件についてだった。それこそ、如何に他人事で気が紛れる私であっても、飽きる程に。と、気付けば時刻は六時を過ぎている。なんだかんだとテレビを見ていたら、どうやら二時間近く経過していたらしい。立ち上がって、朝食の支度をする事にした私は、顔を洗いに洗面台に向かう。テレビをつけたまま。と、テレビの中、リポーターの音が、随分とよく聞く名前を口にする。家からさほど遠くない、隣町の地名だ。ニュースが流れているその間にも、殺人は起こっているらしい。これには流石に驚いた。普通は、「誰某が、何処其処で、何時に殺害された」と言う、事後報告の様なものが流れてくる筈なのに。今日、このタイミングに於いて言えば、それは実況中継と言えなくないものだったから。今も繰り返される殺人行為が、警察も抑えられない程の手口で以て、移動しながら繰り返されていると思うと、流石にぞっとした。

しかし、ぞっとしていたところで私の生活が滞りなく進む訳もなく、だから仕度を再開する事にして顔を洗い、さて朝食の準備をしようとした私は、今日が可燃ごみの回収日である事を思い出し、慌ててごみをまとめて外に出た。

近所の集積所にごみの回収車が回ってくるのは随分と早い。多分、あと十分もすれば回収されてしまうだろう。私は慌てて集積場まで走る。到着までに二分。肩で息をしながら、間に合った事に安堵する。手にするごみを回収ボックスに放り込んで、踵を返して家に戻る事にした。すっかりニュースの事など頭からは消え去り、ごみが捨てられた事で頭がいっぱいになっていたから、だろう。私の住むマンションの前、一人の不審者に全く気付かなかった私は、そのまま玄関に向かう。と、慌てて出て来たが為に、鍵を忘れていた事に、玄関に到着してから気付いた。ため息をつきながら、勝手口に向かうために踵を返した私の前に――それはいた。

真っ赤に染まった、純白のワンピース。

にやにやと、得体のしれない笑みを浮かべて。

合っていない焦点で、何かを探す不審者。

不思議と、悲鳴が出なかった。随分と、頭は冷静だった様に思う。冷静だからこそ、不審者の特

微を探した。探すというよりは、観察していた。これは一体なんなのか、と。それは、随分とか細い、少女。長い髪が、何処となく不気味さを漂わせ、その髪の間、見え隠れするのは着ているワンピースと同じくらいか、下手をすればそのワンピースよりも白い、透けるような肌。顔や服や、腕や髪には、真っ赤な何かが付着している。正しく、付着していた。それは液体であって、しかしところどころに、何やら固形物が、着いていて。だからこの場合で言えば、文字通り付着。

数分の沈黙は、私と、そして対面する彼女の、観察のし合いだったから、だろう。

沈黙を破ったのは、私だった。

「・・・・・・・・・・貴女は？」

自然と出た質問。言った私が一番驚いたが、対面する彼女も同様に、少しだけ驚いてから、体を揺らす。小さな細い、笑い声と共に。一頻笑った彼女は、無邪気な子供か、もしくはホラー映画に出てくるお化けさながらに、人間とは思えない動きをしながら一度、顔の前に垂れている髪をかき分け、私を向いた。焦点の合わない眼で。

「・・・ああ、何という事かしら。私のお人形さんが明後日の為に折角スリッパを要所に刻んで置いていたのに、こともあろうに小さな洗濯機が大事なクマさんを分別なく踏み碎いて咀嚼しました」

耳を疑う。

「柔軟な暴君の姫君が、私を遠く彼方から見据えて笑っておいでです。第四十八外宇宙のシニアス・メタカイロン系銀河は今も重低音をくゆらせながらやってきます」

全く会話の出来ない子だった。私は暫く考えながら、目の前で不気味に上半身だけを左右に大きく振る彼女を見つめた。どうにかして、私は私が出来る事をしなくてはならないのだ。誰に助けを求める訳にもいかない。けれど、どこかで理解していたのは事実だった。そう、今朝からテレビを騒がせている、殺人事件の犯人が、恐らくは彼女であろう事を。ならば、何故こんなところにいるんだろうとか、そういう話は、この際関係ないだろう。彼女にそんなことを聞いたって、まともな返事が返ってくるわけがない。それに、今はそんなことを考えている場合ではないのだ。私の直感が当たっていたら、即ち、彼女が連続殺人の犯人だったら、まずは逃げる事を考えなくてはならない。

何処に？ 恐らく交番に逃げ込めば、助かるだろう、此処から交番までは、走って五分、かからない。でも、もし交番にお巡りさんがいなかったら？ パトロール中で、しかも、あそこまで事件が進行しているんだ。巡回強化をしていれば、それこそ交番にお巡りさんがいる確率なんて、ほんの微々たるものだろう。

ならば説得をしてみる？ それは絶対に出来ないだろう。話は通じない。私の言葉はもしかしたら通じているかもしれないけれど、彼女の返事を理解する事が出来ない。

冷静にいられる事で、ある程度の思考は巡らせられた。ならば、勝手口まで一気に走って、家に入ってしまうえばこちらのものでは――・・・・・・・・なんて、考えていると。

気付けば彼女は、私の真ん前にいて。私を見上げている。

定まらない瞳を、恐怖を覚えるまでに見開いて。笑顔で私を見上げている。

「お月様、お月様。きっとあなたは一人ぼっちね。だから私が此処にいるの。大丈夫です。だって私はどうかしてる。お父さんも、お母さんも、ご馳走様」

両手首が、突然痛くなった。でも、何故だか知らない。
痛くてそっちを見ようかと思った。でも、彼女から目が離せない。
次いで、ゆっくりと痛みが肘に走って、肩まで上がる。
でも、彼女から目が離せない。

「どうしてもっと、助けてくれないの。私は此処までお腹が空いているのに。大丈夫。貴女はこれで、一人じゃないわ。だって私はどうかしてる。知らないお兄さんも、お姉さんも、おじさんも、おばさんも、ご馳走様」

変な音がした。既に痛みは、殆どない。ただ、足元から変な音がして、勢いよく私の視界が落下していた。どうしてだろう。私の膝から下が、本来見えない筈の位置にある。

「そうね。私がここまでくれば、きっとみんなが喜んでくれるでしょう。御免なさいね、お姉さん。私、歩き続けてお腹が空いたのよ」

少女の顔を見上げると、不思議と、焦点が定まっていた。確りと、私の事を見下ろして、無邪気な、歪な笑顔がなくなって。代わりにぞっとするくらいの恐ろしい笑顔になっていた。

「可哀想でしょ？ 私。だってお腹が空いているのに、こんなにお腹が空いているのに、何を食べてもお腹いっぱいにならないの。でもね、一つだけ、お腹がいっぱいになるものがあるのよ。食べてすぐはお腹いっぱいなの。でもね、すぐにお腹が減っちゃうから、困っちゃう」

何処から出したのか、彼女は手に、それはそれは恐ろしい、キラキラ光るナイフを握っていた。そしてそれは、私が、「なんであるか」を理解出来た瞬間には既に、私の体に突き立っている。今までなかった痛みが、一気に体の中へと染み込み、悲鳴を上げる。が、思った以上に声が響かず、今度は口に痛みが走る。

感覚のなくなった自分の腕が、私の口にねじ込まれていた。

「ダメですよお姉さん。此処で叫んだら、私にご飯を食べれなくなっちゃう」

笑いながら、彼女は私の体に突き立ったナイフを、下に下に、下していく。
痛みと恐怖で気が狂いそうになる私はしかし、まだ冷静だった。

きっと、おかしくなったんだと思う。

「それじゃあ ー ー いただきます」

少女の顔が、視界から消えた。視界の下の方に消えたと思うと、何か嫌な音が聞こえる。何度も何度も、体が何かに揺さぶられている感覚。そこで彼女の顔が不意に、再び視界に飛び込んだ。口には、何かを啜えている。長細い、臓器の様なもの。

「やっぱり美味しい。ありがとう、ちゃんと残さず食べるからね。お姉さん」

非日常—— 私の、終わり。

後悔したって、後の祭りだ。誰かに助けてと言っていれば、もしかしたら助かっただろう。自分で何でも出来ると思った。自分で何でも出来ると、思い込んでた。でも——

だからこそ、私は今、此処で死ぬ。

断続的に続く、気色悪い音。

延々続く、気味の悪い感覚。

私の意識は、彼女が満足して立ち上がるまで、消える事はなく。

私の体は、空っぽになってから、生命活動を停止した。



世の中の仕組みは、何とも単純にして簡単だ。小さなガキでも分かる構図がある。

支配する者と支配される者。

それ以外の、所謂グレーゾーンに生きる人間なんて、何処にも居やしない。金が、名誉が、才能が在る者のみ、支配を許されるのだ。逆説的に、それが無い者、自らの才能に気付けない者が、支配する者に蹂躪され、飼い犬と言って良い程の扱いを受ける。

世の中には、「自力で何でもやってる」なんて、誠夢物語を語る阿呆もいるが、少なくとも俺は、そういった類の阿呆を飼い慣らしてやろうと思うのだ。

即ち、俺は支配する人間である。

金を持ち、才能を自覚し、時に餌を放って、人脈を伸ばす。俺の親父は、それが出来ない阿呆だった。そしてそれは、俺のお袋や俺に劇的とも呼べる損害を生み、俺は親父を憎んだ。憎むと同時に、「決して親父の二の舞にはならない」と心に誓ったのだ。

小さな時から、苦勞一つしない俺は、自分で言うのもおかしいが、随分と成績が良かった。それは中学も高校も、大学も変わる事はない。何より、必死に勉強していたつもりはないのだ。だから、成績が落ちる事など決してなくて、常に上限評定。

教員も、クラスメイトも、近所の誰かでさえ、使えるものは全て使った。使えると思えば尻尾を振り、俺に有利な状況だけを作ってきた。それは今でも変わってない。

人間とは、単純なモノだ。少しだけ、気を許したふりをすればすぐにすり寄ってくる。当然、気を許しただけでは靡かない例外もいるにはいるが、金を与えればすぐさま飛びつく。ならば金で買えない人脈はどうするか。勿論、他にも手はある。地位や異性だ。

この世に聖人君子などはいない。釈迦や仏の類もない。全員が全員で、何かを与えてやればいいのだ。支配する者とは即ち、支配される者を如何に掌握するか他に他ならず、聞こえは悪いだろうが、しかしこちら側の人間は、「何かを提供している者」なのだ。何かを提供出来ない者は、短期的な支配しか得られず、結果として奈落に突き落とされる。

故に俺は、救済する者だ。

これは、どこぞの新興宗教やら、似非政治家やらの言う、救済論を説いてる訳じゃない。前途述べた様に、支配する者とは、支配される者の生活や人間性を、支配している全ての存在がその生

涯を遂げるまで、保障しなければならないのだ。そして俺は、俺の人生が終わるその瞬間まで、保障する事が出来る。そう確信している。故の発言であり、思想なのだ。俺は今、周囲を巻き込んで起ち上げた会社に所属している全ての人間を、支配し、生存を保っている。これこそが、裏打ちのある、根拠のある思想であり、発言だと、俺は考えている訳だ。仕事に見合った給与を与え、時に労い、時に叱咤激励する。

間違えて貰っては困るが、俺は独裁者ではない。救済者なのだ。

そして同時に、慈善事業でもなく、慈悲に溢れた人間でもないのである。だから、自分や、そして俺が抱えるべき大勢の為に、有益にならず、どこか有害である人間は、情け容赦なく、斬って捨てる訳だ。使い道のない物を捨てるのと同様に。使い終わった物を捨てるのと同様に。酷いと言われた事もあるが、しかし、よくよく考えてみればわかる事で、人間は特別で、物は平気で捨ていい、などと都合の良いことは言えないのだ。生身の人間だろうが、捨てられる定めを負った物であろうが、行きつく先は同じだろうから。

それを俺は、よくよく理解している。間違った価値観、と否定された事は数あるが、何が間違いであって何が正しいのか、など、俺にすれば些細な違いでしか、ないのである。

「社長、お工作中失礼いたします」

俺が自室で仕事をしていると、男が一人入ってきて、俺に言った。

この男は俺の秘書をしている。なかなかどうして要領がよく、仕事が早い。そこに目をつけ、秘書として雇った訳だが、涼しげな顔して仕事をしていても、時として何か、獲物を定めた獣の様な空気を漂わせるときがある。あくまでも直感でしかないのだが、どうやら昼行燈を決め込んでいるらしい。食わせ者は、はっきり言って嫌いではない。自分が欲しいものを、強(したた)かに手に入れるのも、また一つの才能なのだから。こいつはその点で言えば、恐らくは自身の才能を理解していて、誰にでも出来る仕事を人並みにこなし、ふんぞり返っている様な阿呆とは違っているのだろう。

「・・・なんだ。要件があるならさっさと伝えてくれ」

「はい。実は先月に決定した人事ですが」

「どうせまた、誰かがゴネてるんだろう」

「ええ。営業三課の・・・例の彼が」

「・・・ふう。自分の同僚が上半期に切り落とされた時は涼しい顔をしていた奴が、よくもまあそんなふざけた事を抜かすな」

人間が本当に愚かしいモノだと理解したのは、俺が会社を起こして六年後の事だった。自分に厄介な事が起こらない事を第一にして、事勿れ。黙りこくって自分に目が向かない様に首を竦める。助けを求められても、知らん顔だ。しかし次の標的が自分と判るや否や、やれ「周りが悪い」だの「人でなし」だのと騒ぎ立てる。俺からすれば、救いようのない阿呆だ。ため息をつき、デスクの上に広げていた資料を閉じた。かけていた眼鏡を外し、秘書の顔を見上げて奴の

表情を試しに見るも、この男は平然と、普段通りの無表情を浮かべている。俺の目に気付いたのか、彼は一度礼をしてから。

「お言葉を・・・よろしいですか？」

「ああ。良いよ」

「重役会議では全員承認致しました。役員皆様の捺印もあります。解雇者決定の席で、皆々様が承認する、という事は、それはもう、会社全てから、彼が必要ないと判断された結果ではないでしょうか。差し出がましい様ですが、たった一人の為に会社が傾いては、勤務する我々社員一同が報われません」

「知ってるよ。重々承知さ。俺はこの決定を覆す事はしない」

「でしたら、私は結構です」

うっすらと冷たい笑みを浮かべながら、秘書が再び礼をして、以降口を閉ざした。

「要件は終わったろう。お前、いつまでそこに突っ立ってるんだ？ お前の仕事はいつから、俺の仕事を監視する事になった？」

「いえ。あと十分程で、三社会合に向かう時間ですので」

「・・・そういえば今日だったか。ふん、車を回せ」

「既に」

仕事が早いのは、嫌いではない。俺は一度、鼻で笑ってみた。が、この男がむきになる事や、必要以上のリアクションを返してくる事はない。それは知っている。何度か茶目っ気とやらで、茶化そうとした事はあるが、兎に角こいつは反応が薄い。前任の秘書は、馬鹿がつくほどに真面目で、大袈裟な反応が煩かったが、少なくともこいつ程退屈な人間ではなかったように思う。前任は、残念ながら一昨年を始め、脳溢血で他界した。惜しい人間を失ったと、未だに思っているのは、俺の中では随分と珍しい事のように思う。

席を立ち、部屋を出た俺は、玄関まで足を止めることなく進む。

「会合の後は、帰社致しますか？」

「仕事は粗方終わらせてある。終わったらお前は帰っていいぞ。ああ、それから」

一階に到着し、エレベーターを降りた俺は、エントランスを突っ切りながらに秘書へと言う。いちいち顔を合わせる必要はないので、進行方向を向いたままに。

「会合が終わるタイミングを見越して俺の車を寄越す様に手配しておけ」

「かしこまりました」

扉が開き、表へ出る。この日が慌ただしいのではなく、俺の日常がこれなのだ。この生活が、俺の常なのだ。残業などはしない。しっかりと動き、しっかりと実績を残す。何を努力する必要もなく、何を熟慮する必要性がない。答えは既にあるのだ。ただただ、本当に、パズルをやる様に、ぼんやりと考えていれば、全てが当てはまり、形になる。

何より簡単な事だった。寧ろ、簡単が積み重なっているのが、人の世である。

会合は滞りなく終了した。当社(うち)が不利益を被る訳でもなく、会合相手である二社の面子を潰すこともなく、ただし、しっかりと売り上げはこちらが貰う。取り分は四割。上出来、と呼べ

る結果ではないが、しかし俺の想定していた範囲内には収める事が出来たので、まあ良い。会合で使っていた店の前、俺の車が止まっていて。ポケットからキーを取り出し、開錠ボタンを押す。独特の開錠音が二度、辺りに響き、それに合わせてハザードランプが点灯した。近付き、扉を開いて車に乗り込む。

シートに腰を沈め、息を吐いてみた。

日常に苦痛はない。しかし、何処か少しだけ、息の詰まるのを感じている。

会社の責務は俺にかかるわけで、当然、責任がない訳がない。そしてそれに対するプレッシャーも、全くない、と言えは嘘になる。真剣じゃないという事は、疲れないという事ではないのである。僅かでも思考すれば、それは十分体力を使う事になるし、息をつきたい時だって出てくるのだ。

車の中、そして家に関していえば、そこが俺の、唯一のプライベートスペースだった。

暫く考え込んでから、バッグにしまっていたシガレットケースを取り出し、新品の葉巻の先を切って啜ってみた。ぼんやりと外を眺め、車を走らせるでもなく、ただキーを突き差したまま、それを回さず、ぼんやりとしてみる。外には、何とも忙しない様子の人々が、険しい顔や、あの秘書の様な能面じみた顔をして、辺りを行き交っているのが見えた。その、何と滑稽な事か。

啜えた葉巻に火を灯し、煙を燻らせてシートの背もたれに体を埋めた。

俺もどこか、そういう生き方をしているのか、と思うと、それが嫌でしようがない。生き活きとした生活など、期待はしていない。そもそも、生きていうえでそんなことがあるのか、わからない。誰に使われる事をも嫌ったが故に、俺は今の立ち位置にいる。その事実は変わらない。だからきっと、後悔やら苛立ちやら、または自己否定やら嫌悪感などと言うものは無縁だが、しかし満たされる事なんかも、ないのだろう。

いくら金を持とうが、いくら権力を手に入れようが、どれほどの名声を集めようが、それが喜びに返還されることなどはなく、ただただ、金やら地位やら名声やらの為だけに踊らされている感覚を、断続的に知らしめられるだけに、他ならない。ならば生きていても、何の意味があるのか。それが最近の、俺の疑問。そしてそういう疑問を持つと、決まって俺は、ある店に行く。力なく項垂れていた俺の手に力が入り、緩慢な動きながら、差しっぱなしだったキーを捻って、エンジンを始動させた。どうにも気分が曇天なのだ。だからこの日も、その店へと向かう。

連なるビルの群れ。ビジネス街。車を走らせる事二十分弱のところ、開けた空間があった。地域住民たちが開発を懸命に制止し、残っている広い広い、川。橋には数多の電飾が取り付けられ、初めは取り壊しの叶わなかった事に難色を示していた国も、いつしかこの橋を、人を呼ぶための広告塔に仕上げている、何とも滑稽な場所。川に沿って、小綺麗な建物が数件並ぶ、その中に。最近通う様になった店がある。店の横には、車二台しか止められない、気持ち程度の駐車場があり、そこに車を止めて、俺は外へと足を踏み出した。

別段、感性的に生きる訳ではない俺でも、この空間の空気がたまらなく好きで、だから車から降りた俺は、店の入り口のある、大通り沿いの道へとは向かわず、反対側――川の方へと足を進めた。バッグは車の中に置いてきている為に手ぶらで、財布と携帯、シガレットケースだけを持

って、手すりへと近付く。おまけ程度に備えられている手すりに両腕を預け、ぼんやりと景色を眺めてみたが、既に外は暗がりとなり、あまり視界は定かではない。と、背後から急に、声が出た。

「いらっしゃい。お店はそっちじゃないわよ？」

うっすらと笑みを溢し、彼女はそう言いながら俺の方へと歩いてくる。上着を肩にかけただけの、恐らくは少し肌寒いであろう恰好の女。俺は一度だけ振り返り、鼻で笑って視界をもとに戻した。

「知ってるよ。仕事柄、毎日毎日人工物ばかり見てるんだ。たまには自然を見たくもなる」

「あら、そう。でも店の人間は、客も店員もみんな自然物よ？」

「・・・・・・・・全くだ」

笑う。静かに笑っている俺の隣にやってきた彼女は、俺と同じく手すりに両腕を乗せて、同じ方向へと目を向けた。この、穏やかな空気が、俺はどうにも好きなのだ。

女はひっかけている上着のポケットから煙草を取り出すと、それに火をつけて二度三度、煙を吸った。

「お客さん。最近よく来るわ。どうしたのかしら。何か行き詰ってる？」

「客が酒を飲みに来たんだ。酒を飲むのに理由がなきゃあならない、なんてルール、聞いた事がないが？」

「そうね。でも、貴方の場合は・・・・・・・・何も無いのにお酒は、飲まないでしょう？ そういう人じゃあ、なさそうなもの」

不思議なもので、この女には言い負ける。他の誰をも足蹴にし、踏み潰しているこの俺が、この女の前では形無しなのだ。だから、きっと面白い。俺は観念した様に笑みを浮かべ、顔を落とした。

「どうしても聞かせてほしいって訳じゃあ、ないのよ。それはお客さんの持つべきもの、でしょう？ 私みたいな他人が、ずかずか入っていい事じゃあ、ないんだからさ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「でもね。私も少しはこの世界に長くいるわ。お客さんみたいな人もたまには見る。でも、貴方は不思議ね。何も不自由なんて、しそうにないのに。悩みなんて、何でもすぐに自分で解決しそうなのに」

「俺にも出来ない事はあるよ。例えばそうだ・・・・・・・・悩めない、という事が、当面の悩みか。あとは、自分が嫌になる」

「悩めない事が悩み・・・・・・・・か。私も言ってみたいものだわね」

「そうかい？ 俺からすればあんたこそ、悩みなんてとっとと解決してしまいそう・・・・・・・・というか、諦められる人間に見えるがな」

「諦め、か。ご名答ね。そうよ。私は高くモノを見ないの。そういうものだ、と割り切れれば、案外世の中、捨てたものじゃあないからね」

女は自嘲気味に笑った。が、恥ずかし気はない。恐らく彼女は彼女として、その結論を知っている。恐らくは、諦めのメリットも、デメリットも、心得ているのだ。心得た上で、受け入れて

いるのだろう。そういうニュアンスの、笑みだった。それからの会話は無い。ただただ、お互いに目の前の、ぼんやりと光を反射する川を、辺りの景色を眺めていた。数分間の沈黙は、随分と居心地のいいものだったが、それでも、酒を飲みに来ているのにこれではしょうがないと思い、俺は隣に声を掛ける。

「冷えるだろうから、そろそろ店に行くか」

「……ありがとう。そうね」

翌朝、車の中で目覚めた俺は、まだ昨夜に来た店の駐車場にいる。隣には、あの女がすやすやと、なんとも穏やかな寝息を立てて寝ていた。時計を見ると、朝の七時。この日は午前中に予定がなかったので、まあなんて事もないだろう、なんて思いながら、車の扉を静かに開き、外へと出る。雨が降りそうな、真っ暗な空が広がっていた。ポケットから取り出した葉巻を咥え、ぼんやりと周りを眺める。夜だったから見えなかった色々なものが見えていて、何とも言えない気持ちになった。寂しさや、親しみや、いろいろなものが混ざった気持ちだ。幼い頃、確かに見たことのある光景は、しかし年月と共に忘れていき、いざこういったタイミングを見つけると、どうにも脳裏にちらつくのだ。

果たして自分は、今の生き方に疑問を持っていないのか。

本当に自分は、こんな事をするために生きているのか。

しかし、結局のところ、そんな葛藤を持っていても、意味はない。恐らく仕事を始めてしまえば、こういった感情は全て、俺の頭から押し出されていく。ただ、一瞬の疑問を、ただ一時の誤りを、鵜呑みにして人生を棒に振ったのが、恐らくは親父だった。だからこそ、俺はその二の舞になるのが嫌なのだ。自分を律し、甘えを捨てる。自分を甘やかさず、他人を冷静に判断する。感情で動けばきっと、自分も親父と同じことをしてしまうんだろう。結局のところ、俺は。今までの生き方を捨てることなどは、叶わない。

簡単な事だ。

そういう仕組みが、既にある。

それを壊す術を、俺は持っていないのだ。

だから、支配する立場の人間として、生きていく。

咥えている葉巻の火を消し、俺は車に戻る事にした。

「おはよう。随分と早いよね」

「……………ああ。家まで送る」

「仕事、間に合うの？」

「今日は午後からだ」

「そう」

随分とそっけない会話。

それは昨夜から変わる事なく、どこかそれよりもっと前から変わらない。この女とはずっとこのままだ。初めてこの女と会ってから二か月が経つが、未だにお互いの名前を知らない。素性も知らない。ただそこにいて、ただ客と店員と言う関係で、ただただ少ない判断材料で、互いを認識しているだけの、希薄な繋がり。それがどうにも心地よくて、だからきっと、これからもこのまま、なのだろう。

車のキーを回し、エンジンをかけて、こうして俺たちは、此処から去って行く。

女を無事に家まで届けた俺は、一度家に帰る事にした。時間は九時半。まだまだ時間ならばある。更に言うと、女の家が案外に俺の家から近い事がわかった。入り組んだ場所にある彼女の家から大通りに出て、大通りを十分も走らないで、我が家に着く。地下にある駐車場に車を止めた俺が、バッグやら何やらを持って車から出ようとした時、携帯に着信があるのに気付く。確かめると、知りもしない名前がそこにはあった。どうやらメールらしく、内容を確認する。

先ほどまで一緒にいた、女らしかった。本文はただの一行。

『ありがとう。また会いましょう』と書かれている。何ともあの女らしい、質素な内容だった。そう思うと不意に、顔が僅かばかり綻んでいるのが分かる。まあこれも、悪いもんじゃあ、ない。今までは仕事以外の、使い道のある人間以外の連絡先を携帯に入れた事はなかった。例えば以前付き合っていた女も、その前も。ずっと、携帯に登録した事はなかった。が、これはこれで、悪くない。何より距離感が程よいそれだったから。

『新島陽子』と書かれた宛名に、俺は珍しく文字を打った。

『そうしよう。ではまた』

やはり少しだけ、質素だろうか。まあ、そんなことは考えるだけ無駄だろう。何より、そんなことは普段から、気にかけて事はないのだ。しかし、何処か少しだけ、周りの景色が普段と違う。ああ、たまには誰かを見てやるのも悪くはない、と、そう思った。

上の階へと上がるエレベーターを呼ぶために押したボタン。数分の待ち時間。エレベーターが到着した事を告げる小さなベルの音。と、中には数人の男が立っている。

このマンションの住人ではない。しかし見ず知らずではない、男たち。それは即ち、俺が首を切った、元社員。全員が全員で、真っ黒な、季節外れな厚手のセーターやらコートを羽織っていた。同時に、何故目の前でこんな事が起こっているのかが、何となくではあるが予想出来た。どうしてか――

答えは明白だったのだ。

何せ、彼らが手に持っていたのは、人を殺す事の出来るものだったから。

その金属の板は、恐らく俺に向けられるべき恨みの権化なのだろう。

彼らは全員俺の事を、殺害対象として認識しているのだろう。

彼らは言った。

「俺たちの解雇を取り下げろ」

「そうすれば、命までは取らない」

「頼むから、解雇を取り下げてくれ」

「俺たちにも、生活があるんだ。家庭があるんだ」

殊此処に至って、こいつ等は武力行使に出たらしい。が、目が泳いでいる。焦りを感じる。顔には、とても恰好の所為ではない、常軌を逸したレベルでの発汗があった。きっと、脅しなのだろう。こいつ等は、この程度の事しか考えられないのか。と、失望した。何が『誰かを認識してやろう』だ。さっきまでの自分は浮かれきっていた。人間とは、所詮こんなものなのだ、と、再認識する。

自分が守りたいもの。それは自分を含めて。

もしもそれが脅かされる事あれば、自身に問題があるとは思わない。自分を追放した人間を恨み、棚上げし、脅し上げ、何としても自分を・・・自分たちを保身する。

こうやって徒党を組んでも、こいつ等が互いの障害分子であると理解すれば、足を引き合う。何と愚かしく、何と滑稽な物か。

俺の中にあった熱は一一急激に冷め切った。

馬鹿な男だ。こいつ等も、そして俺も。

感情だけに振り回される行為に、一体どれだけの意味があるのか。だからこその、理論ではないか。それは、感情のみに左右される。野生の動物となんら変わらない。

「返事をしろ！」

震える声がどれほどおかしかったか。

この阿呆どもの顔を見て、どれだけ笑いを堪えたか。

だから俺は、両手を広げる。

こんな下らない命なら、好きな様に奪えばいい。

こんなことで、気が済むのであれば

勝手にしろ。

と。

案外に、“刺される”と言うのは痛いらしい。腹部に、胸部に、痛みが走る。同時に俺の視界は回

りだし、意識と体が分断されていった。

これで、この下らないママゴト(、 、 、)とはお別れだ、などと思ったし、ああ、あの女はこれを知って、どんな顔をするのだろうか。などと、やはり最後の最後まで柄にも無い事をも考えた。諦めとはきっと、こういう事なのだろう。案外にも、許容出来るものなのだ。が、遠くの方、僅か程、声がした。

「――さんがやれって言うから・・・・・・・・」

秘書の名前だった。

遠のく足音。 俺は――俺は。

出来る限りの力で以て、叫んでみた。

まさかあの男が此処に来て、台頭するとは思わなかった。

所詮この世は、支配する者とされる者に還元されるのだ。

所詮この世は、利用する者とされる物に分別されるのだ。

そうか ―― 俺も。

後者だったのか。

バカバカしくなって、笑ったままに。俺は死ぬ。



これから此処に書き記す事は、私が研究してきた全ての事柄を覆した事例である。また、私は公の場に置いて名乗りを挙げる事の出来ない、一研究者である事を理解して欲しい。これを今手にしている諸君は、一体なんの事を言っているのか、皆目見当もつかないだろう。しかしそれは、これから記す全ての事柄を読めば、私が此処で言葉を連ねる事をせずとも、自然と繋がって行く事と思う。

しかし、私が何者であるかは、ある程度の情報を以て開示しなくてはならないだろうから、これより少し程、私の事を書き連ねるとしよう。

端的に言えば、私は犯罪者を研究している。とはいえ、一口に犯罪者と言っても、それは漠然とした呼び名であり、種類でしかない。

主に私が取り扱っている事例は、思考、及び精神が常軌を逸した犯罪者の研究である。とは言っても、私は博士ではない。即ち、それ程の権威もなければ、自らを師と仰ぐ人間もいないのだ。言ってしまうえば、邪道なのだ。巷ではヤブ医者、などと言った言葉があるが、私こそ、まさしくその言葉が相応しい立ち位置の存在である。しかし、不思議と、治安を守るべき存在に必要とされる事が多々あるのもまた、事実だ。これまで数回程ではあるが、精神鑑定を行い、異常と認識されてきた犯罪者たちと向き合う機会があった。が、私は精神科医でもなければ、鑑定士でもない。言うなれば、記録者だ。その私の仕事は、ただただ、対面した犯罪者の発言や、行動を、逐一こうした書類に纏めあげ、そしてそれを、治安を守る存在、組織に手渡す事である。勿論、私から見た見解なども書き添える。何を思っているのか。何を元にして心が揺らいでいるのか。何がきっかけで、そうってしまったのか。専門ではないからこそ、私はそれをつぶさに観察し、そして思考する。間違っていたとしても、それはあくまでも一般人からの意見として、契約の上で成り立っている為、良くも悪くも私の発言に効力はない。あくまでも、私の観察した事や、聞いた事などを参考して、専門家が判断しやすくする為の、謂わば資料作成係の様なものである。あくまでも判断は、専門医と研究者、そして組織のお偉方が下す事であり、私が関与するところではない。かといって、無責任に仕事をこなしているつもりは、ない。私には私にしか出来ない何かがあると、ただ一心に思ってこの依頼を受けているのだ。

さて、私の事はこの辺りで一先ず筆を止めるとして。今回の依頼の話に移ろうと思う。今回の依頼では、冒頭に述べた様に、私の経験や、独自の結論、観察を全て無に帰す事例と遭遇した。三日間と言う、異例の依頼期間に置いて起こった全ての事を、これから私は此処に書き示すのだ。本来ならば、最低でも一か月はかかる事を、三日で終わらせなければならなかった。同時にそれは、私とすれば随分と惜しい事であり、同時に涙を呑む程の出会いとなった。欲を言えば、もっと時間が欲しい案件であったと言うのが、正直なところだ。

まえがきは以上である。

◆一日目◆

六月七日・・・初面会。九時〇六分。六号棟、面会室。晴れ。

この日は初めて対象と接触。事前に渡された資料のファイルには、『機密事項漆〇捌號』と書かれていた。

〇七時三〇分に最寄り駅に到着。迎えに来ていた男二人と合流し、車両に乗り込む。

車両内で渡されていたファイルにざっと目を通し、状況を読み始める。

加害者は若い女性。犯行手口は共通しており、精神鑑定の結果は『嚴重拘束第六項』に該当。異常と認められ、特別留置室に収容との事。

〇八時二三分、該当施設に到着。一号棟二階に設けてある管理室で担当官と会話。

加害者の細かな詳細、ファイル内にあった情報の疑問箇所を照合。その後に現場へと移動。一号棟三階にある渡り廊下を進み、六号棟に到着。エレベーターに乗車。到着の為にエレベーターを降りた後、担当官が諸々の手続きを行う。

〇九時丁度。最後の手続きが完了し、面会室へと通される。

〇九時〇六分。面会開始。

目の前に連れてこられたのは、女性と言うよりは少女と言う印象を受ける。

彼女は専用のベッドに三重の拘束具で繋がれ、ベッドが九十度起きた状態（格好としては、その場に立っている様な状態）で私の前に搬送される。焦点は定まっておらず、口は半開き状態。何か小さな声で唸っている様子だった。レコーダーの電源を担当官が入れ、録音が開始された事を確認した私は、挨拶を試みるも、加害者の耳には全く入っていないのか、それとも理解が出来ていないのか、反応は無し。彼女を搬送してきた護衛官四人のうちの一人が、手にする警棒で彼女の腹部を殴打。途端に加害者である彼女は大声で笑いだす。

※以降、やり取りを記載。

加害者、狂気に満ちた笑顔が和らぎ、微笑む。

「妖怪が、私の大きな胃袋の、そのまた向こうの扉を壊して、十一の怨念と共に走って去った。だから私が小さな時計の、右の端っこにある出刃包丁を抜いて、お母さんになるよ」

錯乱状態か、若しくは幻覚症状の顕現化と考察。

「それはどういう意味かな」

「無理を承知で貴方に言いますが。私は小さくなって、遠くのお空に割り箸をすり替えた。だから夢を見ただけで、貴方が御心のままに幼い子たちを蹂躪していく様を見る光景が絶え絶えに、それでいてワザとらしい重工業の星の元に生まれている。いいえ、大丈夫です。私は正常です。貴方たちの望む応えはきっとこんなものではないんでしょうけど、私は大丈夫です。それが私の心の中に居る、それはそれは大いなる膝枕の致す所存なのです。大丈夫です。貴方たちが心配している様な、流星同士の揺るぎ合いも、恩恵を被って然るべきハスの葉も、きっとあの男が隠したに違いありません。だから父は私に言いましたよ。“いつか見る、浮遊する大なべと小児科医が大地を割る”って」

一度頷く。

「何も無いんです」

今度はゆっくりと首を左右に振り続ける。

「何が何も無いんだい？」

この後に、首を振り続けていた被害者の勢いが増す。首を振る勢いが増した為か、将又他に何かがあるのか、今度は体を首に合わせて動かし始める。

護衛官の一人が再び警棒で被害者の腹部を強打すると、再び加害者が笑う。

警護官の一人が警戒を促し、私は立たされる。

暫くは警護官が加害者を取り押さえている。動きが静かになった事を確認した担当官が再び私を促す。

「君の好きなものは、何かな」

「私が大きな間違いを犯したのは、恐らく魚が雄大に私を翻しているからなんです。だから母は、それこそビルが四つも入りそうな大きな鳥居を、フライパンで切断してしているのです。そうです！ 母は悪くない！ きっと悪いのはパパなんです。パパが風呂敷包みから、無駄な投石を小匙に一杯だったのです！ 私は、だから、私の国に生まれたのです。お父さんがまだ、随分と小さかった頃には、人間は臓器と言う名の、それこそ生き地獄でしかないタイマツに脅えて、案山子の頭をねじ切ったばかりだったの！」

言い終ると同時に震え始める。

仮説：支離滅裂ながら、相手が何を言わんとしているのかを仮想する。

分裂内容から判断材料となりそうな箇所は、バラバラの発言の中で唯一文章構成が整っている箇所、更に、犯行と関係があるとされる発言とする。判断するに――

『母親を庇っている』『父親を嫌悪』『臓器、頭をねじ切る。と言う加害意識の表層化』。

「大丈夫だ。安心すると良い。此処には君のお父さんも、そしてお母さんもいないんだ」

「駄目ですよ！　きっとそんな地球儀じゃあ、雑草と哺乳瓶の不可能ともいえる大合唱を緩やかに妬むだけですから」

対象が完全に、会話による意思の疎通が図れない事が判る。しかしこれはあくまでも仮説であって、彼女が実はかなりの切れ者で、虚偽の発言をしている可能性がある。精神鑑定を行うに当たってはまず、『問題がある』と判断するだろう事は、容易に想像できる。よって、今度は向こうの発言に対するアプローチを試みる。

「じゃあ、どういう地球儀が望ましいのか、教えて貰おうか」

一瞬だけ彼女の表情が啞然とした事を確認。その後、彼女は思い出した様にして言葉を発した。虚偽の可能性有り。

「そうですね・・・私が知る限りでは、八十六週した陸上の動物の皮と眼球を使って釘を打っています」

「それは、どういうものなのかな」

「彼らを知る人物はこの世の中に於いて、私でもなく貴方でもありません」

明らかに瞳の色が、先ほどの状況とは変化している。私は此処で、立ち会っている関係者すべてを外に立ち退かせ、レコーダーを止めて、彼女と二人きりの会話する事を試みる。彼女が虚偽の異常発言、異常行動をしているのか、若しくはタイミングが良く、私の発言と同時に何か別のものを見たのか。その判別を試みる。

「さあ。好きなだけ本性を晒すといい。此処にはもう、私と君しか居ないのだから。カメラや録音機器はちゃんと止めている。安心したまえ」

加害者が突然笑い始める。私は何も言わないまま、彼女の言葉を待ってみる事にした。

「そうですね。貴方が大勢の屑籠と共に太陽を破綻させた木馬の、その材料たる無限の周縁である事は、きっと来世の女神様です。ふふふふふ、私が言った意味が解りますか？ 大勢の貴方がその時を待ち望んでおいでですよ」

文脈が少しずつ構成されている。未だに何を言っているのか、全くと言って良い程に理解出来ないが、しかし、何処となく文章として構築され始めているのが分かった。

「どうやらお腹が減りました」

途端、彼女の顔から笑顔が消えた。随分と真面目な顔で、尚且つ、私にしか焦点を合わせない様にして、こちらを見据える。

「・・・・・・・・霧囲気が、変わったね」

「変わりますよ。私は空腹です。何をにへらにへらしているのか知りませんが、私は今、非常に空腹ですよ。何か食べるものはありますか？」

「此処にはないだろうね、私も持ってはいないのだから」

私の言葉を聞いていた彼女は、首を前にせり出し、同時にそれを傾けて、まるでこの世のものとは思えない、鬼とも形容出来ない形相でこちらを向く。笑っているのか、怒っているのか、将又全く別の何かを考えているのかが分からない表情。

「食べるものならありますよ。今、此処に」

「今・・・・・・・・此処に？ それは、私と言う事かな？」

何も言わずに頷く。

「困った事に、私は君のご飯じゃないんだよ。すまないね。此処で食べられるわけにはいかない」

「・・・・・・・・なぜ？」

「私は君の話を聞きにきた。どうやら話が出来るようになったみたいだから、此処から始めよう。さて、君は何故、大勢の人間を殺し、そしてその臓器を食べているのか」

「そんな事はどうだっていいですよ。私はお腹が減りました」

「ならば後で看守さんにご飯を貰うと良い。今は一一」

耳鳴りの様な音が聞こえたかと思うと、次の瞬間、何かが私の鼓膜を振るわせる。不愉快としか

思えない様な、何かの音。それが、目の前の少女から発せられていると知り、私は慌てて耳を塞いで部屋から飛び出した。外で待機していた看守たちが、まるで既に想定済みだとも言う様に、手慣れた動作で、ヘッドフォンの様な何かを頭につけ、警棒を構えて部屋へと入って行った。私と入れ替わる様にして。

担当官は、私に事情を説明し始めた。どうやら彼女は時として“奇声”を上げるそうだ。どこか、腹の底にある人間の汚い感情を強引に引き上げかねない声で、叫ぶのだそうだ。当初、彼女を担当していた看守たちは、その所為で心を壊された。在る者は、まるで抜け殻の様だと聞いた。また或る者は、突如暴れ出し、以降は此処の住人となったと聞いた。或る者は突然の様に呪文のような言葉を口づさみ、震えが止まらなくなったと聞いた。時々、あるのだそうだ。精神汚染、と言われる現象が。私の行動を見た担当官が「さすがですね。先生」と言った。何もわからなかったが、咄嗟に部屋を飛び出したのが、彼にそう言わせた行動らしい。同時に、これ以上は会話など出来ない事を判断し、一日目はこうして終了する事となった。

◆二日目◆

六月八日・・・面会。九時〇二分。六号棟、面会室。曇り。

昨日の帰り際、担当官に言っておいたが、彼女は今朝、朝食を抜いている。だからだろう。昨日の様な笑みはなく、何か小さな言葉を連ねて、苛々していると思われる行動、言動が目立つ。再び部屋は、私と彼女だけである。更に言うと、彼女と私の耳には、ヘッドフォンがつけられている。私のヘッドフォンにはマイクが付いているが、彼女のつけているものは、看守たちがつけている“ただの耳栓”だ。マイクはついていない。しかし、少なくとも今はそれを使う必要性がない。私は、そのヘッドフォンを首に下げたままに、会話をする事にした。

「おはよう。昨日は寝れたかい？」

「お腹が空いています。何故今朝からご飯が無いんですか」

「その方が早く話が済む」

「どうでもいいです。ご飯をください」

「だったら、私の聞く質問に正確に答えてくれ」

「無理です。記憶が途切れ途切れで困ってます。頭がおかしくなってしまうです」

「大丈夫だ」

「無理です」

「・・・・君は、人を殺したね？」

「いいえ」

「君は大勢の人を殺したね？」

「そうですか」

「何故、殺したのかな？」

「知りません。お腹が減りました」

「お腹が減ったから、殺すのかい？」

「わかりません。お腹が空きました」

「君の中で言う、“人を殺す行為”とは、何だい？」

「難しい話は嫌いです。お腹が空きました」

「質問を変えよう。君は満腹になるとどうする？」

「寝ます。疲れてしまうし、何か体中に気色の悪いものがついてたりするので寝ます。それよりもお腹が減りました」

「おかしいね。君は食事をとった後、決まってある行動をすると、此処には書いてあるけども。それはどうしてだい？ 寝てはいないだろう？」

「知りません。疲れてしまうから、寝てるときもあるし、ぼーっとしてるときもあります」

私はそこで、資料のファイルから一枚の写真を取り出す。

「これを見たことはあるかな」

「．．．．．あります」

「一体これはなんなのかな？」

写真には、真っ赤なペンキの様なもので書かれている、模様とも文字とも取れない何かの羅列が写っている。全く見向きもしないだろう、等と期待していなかった写真を、彼女は食い入る様にして見始めた。二秒、三秒。その後は再び、詰まらないとでも言いたげに、私へと視線を戻す。

「それは、お父さんがお母さんと一緒に暮らしていた時に、必死に私に言っていた言葉です。お父さんは私に、たくさんいい子にしたら、ある星から神様がやってきて、お母さんと一緒にお出かけが出来る様になるって、言っていました。だから書きました」

「すると、この文字はそのおまじない？」

「知らないです。お腹が空きました」

徐々にではあるが、震え始める彼女。私は少しだけ警戒し、彼女への質問を続けた。

「私の手元にある資料には、君は“食事”の後、この模様を只管に書き続ける、とあるけれど。ではこれは、君の意思とは反している何かの仕業かい？」

「そんなものはありません。私が書いたのであれば、それは私が書いたはずです。私が書いていないのであれば、それは私が書いたものではありません」

「なら、これを描いている自覚はあるんだね？」

「これを私が描いたと誰かが言うなら、多分私が描きました」

「君にはこの絵の意味が解るのかな？」

「この絵の意味？ 私は絵を描いてません。私がお父さんから習った文字です。皆が使っている文字です。お腹が空きすぎて死にそうです」

「残念ながら、私はこの“文字”が読めそうにない。申し訳ないけど、口に出して読んで貰えないかな」

「何故ですか。貴方もお母さんみたいに私をおかしな人扱いするつもりですか」

その言葉を言いながら、彼女は再び震え始めた。私は慌てて首にかけてあったヘッドフォンを耳に押し当てる。案の定、彼女は暫く震えた後に、叫び出した。完全に聞こえなくなる訳ではないが、しかし幾分かまして、耳が痛む程ではない。私はヘッドフォンについていたマイクを口まで手繰(たぐ)ると、それを通して彼女に言った。

「少し落ち着いてくれないかな。これじゃあ君に話を聞くことも適わない。質問を変えよう。君は今、何が食べたいのかな？」

私の言葉は、彼女の耳に入っているだろう。彼女の耳に、予めあてられているのはヘッドフォン越しに、私の言葉が流れている筈だ。私の言葉が聞こえたらしい。彼女は叫ぶのをやめて、何かを言い出した。私はそれに合わせてヘッドフォンを外す。

「今はなんでもいいから食べたいです。でもお腹がずっと減り続けるのは嫌だから、貴方で良いです。食べさせてください」

「それは出来ないよ。君と話が出来なくなる」

「そんなことはないですよ。私が食べてきた人たちは、しばらく私とお話してくれましたもの。だから貴方を食べても、きっとお話くらいならできます」

彼女は一度、舌なめずりをして私の方を見る。とりあえず気が紛れた様なので、話題をすり替えて話を続けてみる事にした。

「さて、次の質問だ。君は“ご褒美としてお母さんと出かけられる”と言ったね。では、あまりお母さんとは出かけた事がなかったのかい？」

「お母さんは出かせません。ずっとベッドの上で寝ていました。お父さんがつきっきりで看病していました。だから私はお母さんと出かけていません。お父さんは私を色々なところに連れていきました。お腹が減っています」

加害者の言葉。母親とは外出したいという願望あり。対して父親には“連れていかれた”と言う、受

動的且つ、強制力を仄めかす言いを使用。

「それじゃあ、お父さんの言う“いい子”であれば、君はお母さんと出かけられたのかな？」

「私は悪い子だったので、一度もお母さんとお出かけしたことはありません」

以降のやり取りは不必要と判断し、離席。彼女に挨拶をして部屋を後にする。

六月八日・・・面会后。十時四十二分。六号棟、担当官デスク。曇り。

彼女の身辺を整理するために、担当官に資料を請求。

担当官の立ち合いがあれば可能と言われた為に、立ち合いのもと、資料を見分。

「彼女の家庭環境が全く見えないんです」

「ご両親はご存命ですか？」

「調査員が調べた結果、彼女の住んでいた家は今、空き家です。父親、母親共に死亡が確認されています」

「死亡・・・・・・・・・・ですか」

資料を見ていくうちに、近隣住民からの証言を発見。

彼女の家庭はそこまで目立った異常や、逸脱行動、乃至表面化される虐待事例はなし。娘（加害者・女性）は高校に通っていなかった。小学校の頃はよく見かけたが、誰かと会うと震えながら、何かを叫びながら逃げるため、少し障害のある子だと思われていた。中学は普通に行っていたらしいが、卒業後は彼女が家から出たところは誰も見ていないようだ。

同じ中学校に通っていた生徒の証言は、彼女はかなり幼稚だったらしく、会話がかみ合わない事や不可解な行動、幼い子の様な仕草が顕著に表れていた。一時期はクラスメイト数名から苛められていたとの事。以降、彼女は何も言わなくなり、ただ無言、ただ笑顔でいる事が多かったそうだ。担任だった教諭の証言によると、成績は決して悪くなかったとの事。面談には父親がやってきたが、特に変わった様子もなく、至って真面目な父親の印象、だそうだ。

「外から見ると、ごく普通の・・・・・・・・とはいかないまでも、しっかりしたお父さんと、少しぼんやりした娘、という印象だそうです。それが何でこんな事になったのか」

「外側にまで破綻が見られれば、恐らくもっと事態は早期に解決出来たかもしれません」

私の言葉に少々担当官が面食らっていたが、私は特にそれ以上何をいう訳でもなく、資料へと

再び目を落とす。

犯行に使われた凶器の所在は不明。彼女が標的にした人間に関連性がない為、無差別的犯行であると思われる。犯行は断続的に行われているが、空腹と言う概念の為に、周期的なものではなく、“確実に巡ってくるが、正確な日時や時間軸上の法則性はなし”と言う結果にまとまっていた。また、被害にはあっていない目撃者によるところ、服などの汚れ具合は当然ながら、酷く異臭がした、との事である。恐らくは家には帰らず、当て所なく彷徨っていたのだろう。現に、資料の中にある彼女の家らしき部屋は、此処数年、生活をしている痕跡が見当たらない。電気、ガス、水道が止まっているのは勿論の事、食料品など、生活に最低限必要なものが一切と言って良い程に見つからなかったそうだ。

私は、資料を一通り見終えると、担当官に挨拶をして家へと帰る事にした。

◆三日目◆

六月七日・・・面会。九時十分。六号棟、面会室、雨。

この日は、前日と違い、加害者である少女には朝食を摂って貰ったので、再び会話は支離滅裂である。が、面接中に空腹になる事が予想される為、後半は再び会話が少しは出来る状況だろう。また、昨日の開示されている資料の中で気になる点が二、三あったので、その解明のためにも、最初は支離滅裂の状態である必要がある。

「おはよう。昨日はぐっすり眠れたかい？」

「おはようございます。今朝、とても大きなお経が、私の左足で巻き起こっていたの。ご覧の様に、ネッペンフェルマー卿が、随分と可愛がっていた石垣でしょう？」

「そうかそうか。ご飯は美味しかったかい？」

「ええ！ それはもう。まるで鶏が大空を自慢の四本脚で走っている様だわ！」

「君のお父さんは、今どこにいるんだい？」

「そうなのですか？ 私はてっきり貴方から生まれるものだと思っていたの」

「なるほど。でも私は君のお父さんを生んだりなんかはしないよ。此処にはお父さんがいないからね」

今まではおかしい反応だと思ったが、しかしある一貫性を見つけた。此れは、此処に至ってではない。先日、その前の日のやり取りから見ると、恐らく言葉が滅茶苦茶なだけで、言わんとしていること、彼女の中での言葉では、明確に私の質問に返答を返しているのだ。これは希望的観測

と言う側面を多大にはらむが、しかし私はある仮説を立てた。

仮説：彼女の錯乱・言語間の意思疎通困難は、過去のトラウマが起因されて表層化されるものではないかと考察する。恐らくは性的虐待を受けていた。また、それを頑なに否定する為に、他人や父親には通じない表現を用いる事によって、何か助けを得ようとしたのではなかろうか。父親に対する異常なまでの警戒、そして母性の欲求。尚、これはあくまでも仮定の域を超えないが、彼女は恐らく父親に育児放棄も兼ねてより行われていた可能性がある。

彼女の行う行動は、左記に列挙するものが起因している可能性有り。

- イ、 父親による母親の独占と言う、視覚的情報の誤認
- ロ、 性的虐待に対する父親への嫌悪
- ハ、 空腹と、父親への全ての怒り、感情の誤結
- ニ、 空腹を満たす事が、即ち悪い事であると言う教育
- ホ、 他者への羨望と、其れと並行列の怒り、感情
- ヘ、 独自の暗号化メッセージによる救済要請
- ト、 自己防衛による、空腹時以外の感情、発言の虚無性
- チ、 罪悪感からくる、過食または空腹時のはっきりとした意識状態

最終日である本日は、これをはっきりとさせ、然るべき手段で以て彼女の処遇を援助する為の最終行動を行う。

会話をしながら、私は立ち上がって加害者に近づく。拘束具がしっかりと固定してあるのを確認後、彼女を持ち上げてみるが、拘束具の重量を考えても、背丈とは比率の合わない程に軽い事を確認。

「えっ、ちょ、待ってください！ 私はあらんばかりの大空を飛ぶのです！ あな、貴方の力を借りる必要は、ありません！ そうしないと、ママは王様に食べられてしまうから」

咄嗟に出た発言。捉え方によるだろうが、彼女が性的虐待を無言の内に葬り、止む無く受け続けていたのは、母親の事を考えたからではないかと考察する。誰かに救いを求めると、恐らく父親は、寝たきり（だったと思われるが、詳細は不明）の母親に手を出すと、幼いながらに彼女は思ったのではないだろうか。自分が経験する限りに於いて、それは苦でしかなく、母親に同じ思いはさせたくないと考え、彼女は口を閉ざした可能性がある。咄嗟に出た言葉は、更に続いた。

「早く離してください！ そうじゃないと、罪もない羊が、体に生えている鱗を引きちぎられてしまいます！ あそこに立っているビルは、そんなに優しいモノじゃないんです！ だからお願いです！ どうか神様に偉大なる四十円をお渡しください！」

「どうしよう・・・貴方が私のハンマーを奪ってしまったから・・・きっとお父さんが躍起になって散り散りなんです・・・もう、私にはどうにも関係ありません・・・もう、綺麗な意気地なしも、穏やかな藁(わら)箒(ぼうき)も・・・きっと恵まれない紛争なのです」

直感、とでも、言うのだろうか。彼女は私の行いを理解している。私が真相に近付いている事を理解した、のだから。そしてそれを私が理解した事で、死んでいる筈の父親が自分に乱暴しようとやって来ると、そう思っているのではないか。持ち上げられた事への驚きではなく、何か恐怖するものを突き付けられた様な、そんな反応を見せていた。

「良いかい？ お父さんはもういないんだよ。お母さんももういないんだ。何故なら君が、食べてしまったから」

震える彼女の両肩を強く握り、私は冷静に、低い声で、威嚇する様にそう言った。

彼女はしっかりとそれを聞き、目を見開いて呆然としている。と、それが次第に、にやにやと、気味の悪い笑顔になった。

「そう。私は沢山の粗大ごみと共に晩酌だ。何も恐れてはいない。何故ならそこには、アシタミライがあるのだから。そしてそれは、私の父親として、時に目覚まし時計だったのよ。だから、お腹が減っているの。すべてはそう――あの男が、滑稽なる種火を殴り飛ばしたからいけないのよ。だから私はこう言ったの。

『みんな死んじゃえって』

此れで満足でしょ？ コレガアナタノモトメテイタオオヤマイヌデショ？」

彼女も同じく地を這うような声で、してやったりと言った様子で、私にそう言い、笑い始めた。人を蔑んだような瞳で、人を穢れたものと言いたげな笑い声で。随分と楽しそうに、妖しい光を灯しながらに、笑う。

「成程ね。君は結局のところ、誰かにそう仕向けられた訳では、ないんだ。それはもう、自分で決めた事だった訳か。だから苦痛を感じていない。自分の奇行に。自分の発言に。誰ともコミュニケーションが取れない事に。そういう事か」

「当たり前ですよ。貴方は分かってくれないかもしれないけれど、私のお母さんまでもがあの密教の手下でした。私は何度も言いましたよ？ 『スコライティ神父は間違ってる』って。でも、

その忠告を無視したのはあの人なのよ。だからまるで、虫けらみたいに思って、それで私は、あの母親擬きを地下の供物の流れ弾だったのよ」

更に笑う。どうやら彼女は、母親さえも憎んでいたらしい。

両親を憎み、自分を呪い、周囲を嫌い。彼女はそうして、作られた。自分で選択するのと同時に、彼女は環境そのものの、餌食になった。きっと、本当は助けて貰いたかっただろうに。周りがほんの少し、手を差し伸べれば良かっただけなのに。

月並みな結論を述べると、彼女は加害者であると同時に被害者でもある。しかし、それは一側面だけを見ての物言いだ。彼女は、しかし確実に、悪意を持って人を殺し、そして貪る。嫌悪すべき父親から教わったのは、それのみだったのだろう。

私が理解出来たのは此処までで、そして同時に、自分の無力さを呪った。この仕事を初めて、何度か同じ思いを抱いたことならばある。しかし、此処まで完膚なきまでに無力であると、正面切つて言われると、どうにも逃げ場がなく、虚しく思えてならなかった。

私は話を聞くだけなのだ。話を聞き、対象が何を思っているのか、何故そうになっているのか。現状はどうあるのかを、ただただ記録し、観察するだけに過ぎない。時としてそれは、こうも残酷な物なのか、と痛感させれるが、私は医師でもなければ何でもない。ただ、一介の観察者なのである。

私が最後の面接を終え、部屋を去ろうと席を立った時、彼女は大笑いを辞めた。

「お腹が減った……けど、お兄さん。最後に一つ良い？」

「……………」

私は無言で頷いてみる。どんな呪い言葉を吐かれるのか。どんな嫌悪を抱かれたのか。それは想像を絶するものかもしれない。しかし、意を決する。何処まで行っても、私は観察者なのだから。自分を殺しにかかる言葉であっても、自分を殺そうとする人間であっても、私はその行為を、言葉を。明確に書き記さなくてはならないのだ。

少女は 何故か穏やかそうに 笑う。

「ありがとう。寂しくなるね。折角あなたを、食べなくてもいいかなって、思ったのだけれど。でも、初めて。貴方程美味しくなさそうな人」

笑顔で彼女は　　そう言った。

私はどうしていいか困りながら、返す言葉を考える。が、考えたところでしっくりくる言葉がなくて、だから思い付きのままに「嬉しいよ」とだけ言ってみた。

？　　――後――　　？

資料を提出した私が、彼女の死を知ったのは――資料を出して、僅か三日後の事だった。あの笑顔の意味が解らなくて、しかしそれを考えるのは野暮だと思っていた私は、新聞の、随分と小さな箇所、その文字を見つける。

『連続殺人犯、拘置所近くで惨殺』

淡々とした見出し。淡々とした内容。ただ、『精神異常の連続殺人犯が拘置所を脱走するも、何者かによって殺害される。不可解なのは、手足に残る噛み痕か』と言った内容の事が、書いてあった。

せいぜい“もう会わないだけが故の、別れの言葉”くらいのものだと、心のどこかで思っていた。しかし、もしかしたらあの時、彼女はもう、死を知っていたのでないだろうか。どうにも、忘れられない笑顔だったのだ。実は、純粋な子だったのではないか。そう思えてならない。何とも言えない気持ちのまま、私が読んでいた新聞をデスクに置いた時、事務所の扉が開く。

「失礼します」

現れたのは、彼女を担当していた担当官の男。彼は、私のデスクの前まで来ると、懐から封筒を一つ、取り出した。

「彼女が、これをどうしても貴方に、と。どうにもおかしいと思ったので中を確認しようか悩みましたが、我々では彼女の言葉を理解出来ないだろうと思い、開けていません。ですが、一応本人の遺言みたいになってしまったので」

説明を終えた彼は、封筒を私に手渡すと一礼し、事務所から去って行く。ペーパーナイフで綺麗に封筒を開けると、中には便箋が入っていた。折ってある便箋を広げた私は、思わず目頭が熱くなった。

何とも一生懸命に。それこそ、小学生が描くような文字で、懸命に文字が綴られていた。支離滅裂な文面ではなく、文章として成り立っているところを見ると、彼女は恐らく空腹時、懸命に食

欲を抑えながらこの手紙を書いたのだろう。紙の至る所に、自分の血らしきものが着いていた。新聞に書いてあった噛み痕……もしかしたら、これを書くときに自分で気を紛らわしたのかもしれない。などと、一人そう合点してみる。

『

お兄さんえ

お兄さん。わたしわ、お兄さんとおはなしできてよかたです。

なにもはなしてませんが、よかたです。お兄さんわ、ママやほかの人とわさがって、

わたしのおはなしおさんと、きいてくれました。だからうれしかたです。

もう、おはなし、できなこけど、ありがとうございます。ありがとうございます。

わたしわ、まさがてしまいました。だから、たぶんじょうずに、いれないです。

でも、たのしかたです。ばいばい

』

改めて、無力を呪った。これが、彼女の呪いかもしれないのだ。でも、彼女は懸命に、私に手紙を書いてくれた。たったあれだけの会話であっても、彼女は私を救いと思ってくれたらしいのだ。そして、自分をそう思ってくれた彼女は、もういない。

本来、観察対象に情を移すところなのだ。しかし、彼女の場合は別ではなかろうか。私が彼女にどう思う、やら、彼女が私をどう思う、と言った言葉ではない。

彼女は確かに人の道を踏み外した。

落ちた、のではない。確かに自ら踏み外し、自ら崖を飛び下りたのだ。落下の途中、何度も捕まって落下を防ぐ枝が在ったろうに。それには見向きもせず、彼女は自分の意思で、それを無視し、そしてもう、戻れない場所に行ってしまったのだ。

信用できるものが無いから、飛び下りたのに。途中にある枝が信用出来ないのは、明白なのに。それを捕まらなかった本人が悪いと、どうして言えようか。そして、落下し、たまたま一本当にたまたま見上げた空に、彼女を助けようと必死に手を伸ばした枝を見つけたのだ。そして彼女は、その存在を知り、微笑む。

ありがとう。ごめんね。もういいよ。 と。

かくして、私の研究の中。特異で異質な三日間は、彼女の死を以て完全に閉幕する。彼女の存在に遭遇して以降、私は心理学を学び始めた。何の為に――？

私は今、資格を取ろうと思っている。臨床心理の立場に身を置き、彼女の様な人間を一人でも多く、助けたいと願ったからだ。

彼女はもういいと言った。笑顔で。そう・・・完膚なきまで悪意ない笑顔で。

手遅れなのは知っている。しかし、これは彼女が残した種ではないだろうか。私と言う苗床を漸く見つけ、彼女は私に根を張った。きっと彼女は、こんな事を望んではない。

しかし、自分の無力がどうしても嫌だった。だからこそ、彼女の為ではなく自分の為に、私はこの芽を大事に育てていこうと思う。

あの笑顔を、続けて見られるように――。



此れで小噺、小唄の類。ワタクシ全ての知るトコロ。語りに尽きて御座います。どうだ、どうだの皆々様よ、息をばお呑みになったか知らん。目玉をひん剥き聞けたか知らん。たったの少しであっても何処か、人の世の事、出来事よ。誠、何処かにある噺。何処にも在って、転がる噺。滑稽話だ、与太話。たったの一刻(いつとき)だったとしても、笑っていただけましたなら、お道化たワタクシ、喜んで、嬉し涙を流して御座る。

しかとご覧よ、ワタクシ面を。此処です、ご覧よ、涙に御座い。故にお道化、被る仮面は、そう言う趣向で涙を流す。顔で笑って心で泣いて。いやいや、其処まで綺麗に御座らん。在るのは只管面白可笑し。自分で詠った小唄の類、語るワタクシ笑ってみれば、聞ける皆様笑い出す。此れが創った噺であれば、恐らく可笑しさ、足りませぬ。問題なのは、此の小唄。事実、誠にある噺。だから余計に可笑しくなって、笑ってしまう訳なのです。

さあさ、全ての小唄は此処に。小噺、最後の最後まで。唄ってお聞かせしますれば、ならばワタクシ、此の辺で。おさらばさせて、戴きましょう。宴(えん)も酣(たけなわ)、カーテンコウル。拍手喝采要りませぬ。ワタクシ唯々語るが為に、こうして唄をば気まゝに詠い、去って行くので御座います。御代、其の他の気遣いも、御無用宜しく申します。さらば、さらばで皆々様よ。

おっとすっかり忘れて御座る。唯の一つの御注意を。ワタクシお道化、こうして何時も、滑稽噺に与太話。集めてお披露目致して御座る。故にお聞きの皆々様よ。唯々ご注意戴きたくは、どうか皆様、今後の道を、確りと外されませぬよう。御気を付けて下さいませよ。もしも皆様、不幸があれば、ワタクシ何処かで必ず其れを、見聞きてにやりと頼緩め、こうして何処かで詠う唄。小噺ネタにて使います。するとまたもや別皆様の、笑いの種に相成り候。其れが嫌なら忘れてくれるな。こんな阿呆が何処かにいるのか。ならば吾はばそう成るまいと、努々お忘れなき様に。

其れでは此れにて、御免御座来。
さらば、さらばよ皆々様に。深く御礼申しあげます――。

暗転。



何故、僕がピエロをしているのかって？

そんな事を聞いて何が面白いのか。まあでも、聞かれたからには、応えるのが礼儀だろうから、だから教えてあげようか。

訳あって、僕は少しだけ長く生きてる。其の訳は、別に聞かれていないから応えないし、聞かれたところで応える義理はないから応えないけれど、まあ、兎に角僕は、本当に、ほんの少しだけ、君たちよりも長く生きている訳だ。するとね、此れだけ溢れた人間たちだ。おかしな奴等が出てくるだろう。同時に其れは大きく広がり、いつかおかしな物が増えていく。どれほど増えているかは、定かじゃない。

でも、少なくとも他人の不幸を喜べる人々が多いのは、恐らく周知の事だろうね。兎も角一一。僕は人助けをしているつもりはないんだよ。本当に恵まれなかつただけの人間が、かくも笑いものになるんだ、なんて知ってからは、僕は其の笑いを、道行く大勢に提供しているに過ぎない。唯の其れだけだ。

嗚呼、君が誤解している事が多数あるだろうからね、其れをちゃんと正していこうかな。

まず、僕の持つ此の笑い噺は全て、フィクションであってノンフィクションだ。意味が解るかい？ 多少の脚色と、多大な事実なんだ。だってそうだろう？ 僕は其の様子を見ていたし、そして其れを全て語っては後が怖い。僕の話は不特定多数に向けて、路上で行われているのだから。だから、其れこそ個人が特定出来てしまったら、関係者が僕を放っておかないだろう。僕としても、娯楽ついでにやってる事で、痛い思いはしたくないからね。だから、此れはフィクションであってノンフィクションなんだよ。何処かの誰かは、本当にこういう人生を歩んでいるし、何処かの誰かは、此の小噺の彼らに近しい人生を背負っている。第一ね、君たちの言うところの相対論や、二極論なんてモノは・・・・・・・・これは僕が創った造語に近いね。要は、全てのものに反対の意味や、対になる存在がある。なんていう馬鹿げた考え方の事だけでも。

まあ、其れはいいとして。

そんな考え方がある段階で、甚だ可笑しな、何とも滑稽なものなんだよ。

少なくとも、そんな単純なモノで、全ての事が証明出来る訳がない。仮説でも、仮定でも、定説でもなく、事実としての事象がないんだ。数式や、理論の上だけで納得いく方がどうかしている。そんな前時代的なものに縛られている段階で、僕としては此の上ない滑稽な話さ。要は、僕はそういう限定的な考え方を笑っているに過ぎない。

人間が真理を追い求めたところで、其れは単純な絶望しか生まれない訳だ。其処に喜びを見出す人間は、きつともう、人間としての機能を残していないのさ。抑々(そもそも)、全てを見た人間はいないんだよ。そして、“机上の空論”で全てを考えれば、答えは必ず、無に還元される。此れはもう、間違えがないと言って良い。其れこそ、専門的な知識を有していない小さな子供にだって、判る事だろうからね。

わからない人間は、流されるのさ。

地位や、権威や、その他、其れらしきものに振り回される。気が付けば通説や、常識が生み出され、分類不可とされる“純粋な要因”を排他し始める。君の周りにだって、そういう人は居るだろうし、そういう事はあるだろう？ だから僕は、そういった考え方全てを笑いものになっているのさ。現に、其れを笑う人間が多いのもまた、事実だからね。

此処までは、何処にでも在る物の見方だ。

でもね、僕は其処じゃないんだよ。僕が追い求めているのは其処じゃあ、ないんだ。

何と言っても、学術と云うモノは偉大であり、美しくもある。荘厳なる音楽を聴いている時。壮絶にして膨大なる情報を内包している絵画を見る時。若しくは、先程出た、神々の贈り物、なんて称される、誠整然とした数式を眺め、紐解き、対話を重ねる時。

万物の全てはこうも美しいと知る。だからこそ、其の側面だけを注視し過ぎてはいけないんだ。

偏った言葉や、偏った思考は時として嫌悪であり、醜悪でしかない。

肝心なのは、全てを慈しむ事だと、僕は思っている。

唯、残念な事に。常識と言う言葉が、其れを阻んでしまう訳だ。僕は其れを嫌と言う程見て来た。同時に、僕は本当に失望してしまったんだよ。人間、と云うモノを。故に、僕は其れで遊んでいる。故に僕は、人を大事にしていない。何故ならば、人は人を大事に出来ないモノだから。傷つけ、蔑む事でしか、他者と関われないのであれば、ならば其の全てを侮蔑し、軽蔑してやればいい。自ずと気付くものがあれば、其れに越した事はないからね。個としての存在は、決して悪いものじゃあないんだ。唯、集団となると、話は違う。誰かに疎まれたくない、とか、仲間がいなければならない。とか、そういった感情に左右される。苛まれるんだ。

此れで、君の言うところの質問――僕が何故ピエロをしているのか。と言う回答になっていると思うよ。

既存する価値観や固定観念を大事にするならば、其れは其れでいいだろう。僕は否定しない。唯、其の景色たるや、なんて事はなく殺風景であり、何処までも視野が狭くなるのは事実だ。そして其れを、馬鹿にしているに過ぎない。

唯一――詰まる所で。

意味なんて、ないのかもしれない。

僕は其の考え方によって冷遇を受けた事も、その常識に絞殺される事もされてはいない。被害なんて、ほんの少しも在りはしないのだから。だから、外側から、面白可笑しく見ているだけだ。そして、面白く、おかしいからこそ、声に出して笑うだけだ。笑って、語るだけだ。

“世の中には、こんな人間がいるんだよ”

“君たちの言う常識に当てはまれば、こいつ等は馬鹿だろう？”

なんてね。

此の言葉の意味が、本当に判る様になったら、きっと君は、僕の存在を必要としない証だろうね。此の言葉を、そのままに捉えるだけならば、きっと君は、此の物語の人物を異常と捉え、同時に他の誰かから、君は異常だ、と思われている。どちらかなんて、どうでもいい。此れも結局は、君たちの概念に当てはめて述べ連ねているだけの言葉に過ぎないのだから。

少々余談が過ぎてしまったようだ。僕はそろそろ行くとしよう。

何処にかけて？ 新しい、小噺を探しに行くのさ。

また、君とは会う事があるかもしれない。そしたらまた、僕が見つけた小噺を、ほんの少しだけ紹介してあげるよ。

それじゃあ、よい明日を。

道化の仮面を被った男の言葉より――

あとがき

初めまして、の皆様。この度は拙いながらも書かせていただきました、『断片集一道化小噺一』をお読みいただき、誠に有難う御座います。作者の藤七志(ふじなし)八咫(やた)と申します。

お久しぶり、の皆様。僕は生きてます。そして、漸く完成致しました。ご声援、その他数々のご助力、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

さてさて、ここ最近は本当に、暑いのか寒いのが分かり辛い天候になっていますね。皆様、体調は如何でしょうか。

僕は、と言うと、特にこれと言って何もなく、最近の運動不足の所為で、すぐに筋肉痛になるくらいです。

時期的には雨季・・・梅雨ですが、あまり雨に崇られなかったのは、助かりました。でも、テレビを見てたら『水問題』的な物言いがあり、結構まずいんじゃないの？と不安になってます。なりながらも、がぶがぶ水分摂取です。正直、傍から見たら「全然心配してないじゃん」とか言われかねないくらいにがぶ飲みです。すみません。

おっと、このままいくと、本編に全く関係ない感じのままあとがきを終えてしまいそうなので、そろそろ本題に入るとします。「どうでもいいよ」とか仰らずに、最後まで読んでいただけると助かります。はい。

『断片集一道化小噺一』

基本的に、このタイトルはすぐに決めました。短編集でもいいかな、とか思ったんですが、あまりに捻りがないのはなんとなく残念なので、こちらにしました。

本編形式は、短編であり、それぞれの主観（例外もありますが）として、連ねてみました。全体を冒頭のピエロが皮肉って語り、それをひとつひとつ見ていく感じになります。

短編、なので、一つを短めに作ったのですが、展開の運びが難しく、かなり局所的な話になりました。判り辛い箇所が多々あるかもしれませんが、ご容赦下さい。

大事にしたのは、何よりそれぞれがどういう境遇なのか、です。敢えて書いてないお話もあるし、細かく書いたものもあります。何となく全体を通して、人物の生い立ちをまとめたものもありますので、足りない個所は、会話や何となくの仕草などで補った形になりました。生涯の背景は、あんまりありがちでもいけないし、突拍子もないものも避けました。何処かにいそうで、何処かに在りそうな感じに仕上げたつもりです。それぞれに鏤(ちりば)めたちょっとした考慮個

所や、ピエロが何であったのか、についてはなるべく言及せず、お読みくださった皆様の独自解釈に託しています。決して投げてはいません。断じて投げてはいませんよ！ちゃんと設定はありますが、それを押し付けるのはあれなので、皆様のご想像を大事にしたい、という、茶目っ気です。

此処では深く、メッセージやら投げかけをしませんが、結構全編通してそういった色合いが強いです。そして、僕が書くものは比較的そういった物が多いので、ちょっとした自問自答のきっかけとして捉えていただけたら、幸いです。

また、僕は普段、こういった話はあまり書かないので、初の試みでおどおどする箇所がありました。出てくるピエロも、ああ破天荒な発言や行動は、結構浮きすぎている傾向がありますが、そういう人物である、と言う事が際立つので、結果としてよかったかな？と。

何にせよ、僕が書く物をお読みくださった事で、何かを疑問視していただければ、もうそれに越したことはありません。勿論、楽しんで読んでいただく事が前提としてありますが。“此れ其れは、こういうものだ！”など、恐れ多くて言えないので、ただ、こういう考えってどう？ぐらいに書いている、と、お考えください。

さて、こういったテイストのお話を書かせていただけてます、藤七志ですが、過去作品を別名で書いていた時、お読みくださった皆様から頂きましたお言葉は、本当に活力となっています。様々な人が、様々な思いで生活している。そしてそれが報われても報われなくても、皆懸命に生きているんだぞ！と言うような事を、お話の中で伝えられる様に、精進していきますので、どうぞ此れからも、不肖、藤七志八咫をよろしくお願い致します。

と、言ったところで、以上を挨拶とさせていただきます。
重ねて、拙い文章ですがお読み戴いました皆様に、この上ない感謝を込めて。
厚く御礼申し上げます。

2013.06.30. 藤七志 八咫